フロムゲーを梯子転生したら元の一般人にもど…れませんでした

ヅダ神様

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何処にでもいる脳筋二刀流大好きマン兼脳筋パイル大砲マンの「神楽坂浩一」は、ある日目が覚めると初代ダークソウルの世界で目を覚まし、なんやかんやあって闇の王ルートを達成、その後特段でもない事情からアクロバティックな自殺を敢行し、今度は現在進行形で獣狩りの夜が起こるヤーナム市街で目覚めてしまう

まぁそこでもなんやかんやあって上位者を皆殺しにして新たな上位者に至った彼は、これまた特段でもない事情からダあの手この手で育て上げた弟子に殺され人生を終えた

はずだったのだが初めてダクソ世界に転生した日、元の世界の自分の家で目を覚ました彼は、ようやく平穏を取り戻せたことを喜ぶも、世界というものは彼に安寧を、許さなかった…

これは現代社会が壊れぬよう死ぬ気で頑張る主人公とその他の物語である

目　次

序章　その男の足跡を辿る ―― 1
第一話　夢とは甘美なものだよ、貴公 ―― 7
第二話　狩人の技は、脳裏ではなく魂に刻まれる ―― 11
第三話　彼方の幸福 ―― 19
第４話　主の帰り ―― 24
第５話　貴公、年貢を納める時だな ―― 32
第６話　天下無双の大決戦 ―― 37
第７話　夢壊れたり ―― 43
第８話　狩人の矜持　導入 ―― 51
第８話　狩人の矜持　前編 ―― 61
第８話　狩人の矜持　中編 ―― 67
第８話　狩人の矜持　後編その１ ―― 75
第８話　狩人の矜持　後編その２ ―― 88

序章　その男の足跡を辿る

ゲームの世界に転生できたら、それはきっとすごく幸運なことだろうと思う

現実で体験できないことが体験できて、自分は特別な存在になれる。なんて、頭の悪いことを考えていた。……たぶん、今これを読んでいる君たちもそう思ってるんじゃないだろうか？

しかしそれがフロムでも屈指の詰みゲー、数々の理不尽でプレイヤーの心を粉砕してきた「Ｄａｒｋ　Ｓｏｕｌ」の世界だったらどうだろうか？少なくとも俺は選ばない。まだガンダム世界の方がマシだろう

中世ヨーロッパみたいな世界が舞台のダークソウル、その中でも全ての始まりである初代ダークソウルの世界に転生した俺は、幸運なことにダークサインが現れた直後、まだ世界が荒れる前の時代に生まれることができた

まぁ不運なことに不死人として転生した俺は当然ながらグウィン王の名により派遣された銀騎士やら傭兵やら盗賊やら別の国の兵士やら貴族やら、時には村々の人々から何度も何度も殺され、何度も何度も騙され殺され、いつかこの悪夢のような不死の呪いを解くために足掻き続けた。多分４００年くらい

で、まぁその４００年の歳月が俺を燃えカスとは言えグウィンを殺すレベルにまで押し上げてくれた。んで、不死の呪いを解くために俺は闇の王になった。理由はシースと協力して色々不死について調べた感じ、最初の火から見出された王のソウルにより神の時代が続いているから不死の呪いが生まれるのであって、その火が消えれば神の時代が終わって呪いも消え、人は人のままに生きれるから呪いも消えるっぽいと言う話だったからだ

因みにシースはなんやかんやあって十分の九殺ししたらソウルくれたので尻尾の月光だけ奪って野に返しました

で、闇の王になり、晴れて人の時代到来！　不死の呪いも解けて世

界最高！　になるかと思いきや呪いも解けずに人類は全員不死の呪いで亡者とかしてしまいました

　あのクソ姑息プラチナトカゲぱちこいたな!?　と怒り狂った俺はシースを殺すために世界中をくまなく探したが何処にも見つからず、その過程で重大な真実に気づいてしまった。この世界で亡者でないのは俺だけで、他にまともに喋れるのは小言のうるさいクソヘビオンリー。俺の意思通りに人形みたいに動く亡者はどいつもこいつも見れたもんじゃない腐った骨と皮だけの死体みたいな有様だった。これじゃあ女の子いっぱい侍らせてハーレムプレイしようにも全員男か女かもわかんねぇクソ亡者ハーレムしかできねぇじゃねぇかふざけんな！

　こんな亡者と小言のうるさいクソ蛇だけの世界なんてとても生きていけねぇ！　と思った俺は、ウーラシールの深淵でマヌスをボコボコに処した時に奴から奪った人から人間性だけでなくソウルを抜き取る秘法を使い、自分の肉体から魂を抜きとると自らの愛剣である深淵の大剣に使用して武器を強化することで文字通り命を消費して無事自殺することに成功した

　まぁ肉体は亡者になるからクソヘビと一緒に永遠に生きるだろうが俺は死ねたから無問題である

　しかし自殺に成功してやっと辛気臭い世界とおさらばできたと喜んだら、今度は鐘の音と赤ん坊の鳴き声がうるさい近代ヨーロッパ風の建物が立ち並ぶ…標識にはヤーナムと書かれた街で目を覚ますことになった

　なんで？　どうして？　と現場猫どころか茫然自失して宇宙猫状態になったが、どうやら俺はＢｌｏｏｄｂｏｒｎｅの世界に来て、おまけに狩人（月の魔物のおもちゃ）になってしまったらしい。ルビがおかしかった気がするがまぁいいだろ

　で、幸運なことにダクソから武器や防具を持ち越すことができた俺は意気揚々と獣狩りに出て、そこら辺を闊歩していたクソデカワン

ちゃん（最初に出会う獣）に見事ワンパンされました
いや～まさかガチモンの神様…いや厳密には違うのか？　まぁ大体神様みたいな英雄様が来てた鎧がそこらの獣風情のワンパンで切り裂かれるとは思ってませんでしたね
んで、夢の世界に来た俺を手厚くもてなしてくれたらゲールマンにゲームで飽きるくらい聞いた狩人の説明を現実で初めて受けるとか言う中々に不思議な体験を終えたら人形に挨拶していざ上位者狩りである
んでなんやかんやあって無事３番目の臍の緒の４本目を手に入れ、無事ＤＬＣ聖杯含めて殺せる敵は全部殺して、最後にゲールマンと月の魔物をぶち殺がすことができたので晴れて上位者になったわけなんですが
ぶっちゃけた話、上位者のいいところがなかったので今すごく辞めたいです、上位者
人間よりも高次元の種族？　まず上位者って完全に独立した個体なのよね。ようは思考の瞳とブラボ世界で呼ばれるものはようは単体で宇宙での活動を可能とするためのアイテムに過ぎないのである？　て思うじゃろ？　俺も最初はは？　ってなったけど、要は上位者と呼ばれる存在は宇宙を自由気ままに泳ぐ海遊個体の総称みたいなもので、文字通り無限に広がる宇宙の環境に適応するためのある種手段として、生物としての次元を引き上げるためのアイテムであり、つまるところ上位者とは思考の瞳により高次元に至れた存在の総称であって、上位者という種族があるわけではないのである
これの何がえげつないかって文化言語生態ｅｔｃ全部バラバラだから相互理解ができない、あと宇宙広すぎてそもそも出会えない、宇宙の環境が極限すぎて下手すればあっさり死にかねない、後宇宙広すぎて一人だと孤独死しそう、そもそも増やそうと思えば増やせるけど自己で完結してるせいで繁殖欲がないから性欲も湧かなくて女の子に興奮できないと言うか、そもそも女の子に興味が湧かないｅｔｃｅｔｃ……上げ始めたらキリがないのだが、少なくとも俺から見た上位者はゴミだ

で、さらに言うと個人的に一番クソだと思うのは高次元に至ったおかげで次元の低い人間たちの基準が一切わかんないから簡単なコミュニケーションはともかく相手を慮るとか、配慮するって思考が持てない。あるとすれば蟻を相手に「踏み潰すの可哀想やな」と慈悲を持つ程度で、おまけにゲームや漫画など娯楽関係も絵画などごく一部のものを除いて全く興味を抱かなくなってしまった

マジでクソオブクソの代名詞みたいな存在やめたいから自殺しようとしたんだが、上位者の本能のようなもののせいでそれも失敗してしまう

そこで閃いた、自分も月の魔物殺して上位者になれたんだから才能ありそうな人間を片っ端から狩人にして鍛えて鍛えて鍛え上げて俺を殺させればいいじゃんと

今振り返れば頭悪いと言うか、人間としては終わってたとわかるんだけどもう当時は上位者をやめたい一心で弟子に自分を殺させよう計画を実行しました

簡単に言うとまずヤーナムその他諸々を上位者パワーで夢に切り取り、ループできるようにして俺の眷属を配置し、狩人として適性の高いものを拉致して狩人にし、ゲールマンの役割を俺が、人形はそのまま続投させて狩人の夢を運営してひたすら狩人を育成していく

んだが全然目が出ない。どいつもこいつも俺に辿り着く前にローゲリウス三連星とかロマ＋小蜘蛛の代わりに大量の古狩人とかと戦う中盤で死んでしまう。俺を殺すとしたら未強化初期ステキャラでノーダメくらいじゃないと勝ちの目すら見えないんだけどなぁ……

なんて考えてたら来てくれました。日本人とフィンランド人のクォーターらしいけど才能の塊みたいな子で、これまで数多死んでいった弟子たちはなんだったのかと思うくらい、あっという間に最終決戦となったのだが

なんと衝撃的なことに俺の計画に勘づいていたと衝撃のカミングアウトをかましてきやがりました。いやまぁだいぶやばいって思ったんだけど更にやばいのが「あなたの血の意志を取り込み、永遠に一

つになりましょう」
とかクソヤベェサイコヤンデレ発言かましてきやがりまして、正直上位者になってから初めて死にたくないと思ったよね
んで、なんやかんやガチバトルして敗北し、クレイジーヤンデレ弟子に殺され、彼女と一つになった俺は無事死亡できましたとさ。めでたしめでたし

見覚えのない部屋、見覚えのない家具、見覚えのないゲーム機、ＰＣｅｔｃ…全てが見覚えのないもので構成された誰かの部屋の、布団の上で目覚めた俺はゆっくりと体を起こすと
「で、終わらないのはなんでだ？」
と、流石に3度目ともなれば絶望すらも通り越して達観の域に心情が達してしまった俺がそう呟く。そしてたまたまＰＣのモニターに映った自分の顔を見て目を見開く
パッとしない冴えない男の顔、見覚えは微かにある程度の、もう二度と戻らないと思っていた、諦めていたはずの自分の顔だった
「……」
無言のままに、しかし震える両手で躊躇しながらも顔に触れる。最初は夢か幻覚で、触れた瞬間それが終わってしまうような気がして恐る恐る指先で軽く触れ、終わらないことを確認してからゆっくりと両手の掌を頬につける
「あ、あぁ…」
そして、確かな感触をしっかりと両手で感じ取れた、夢でも幻覚でもない、確固たる現実であると、理解した瞬間大粒の涙がとめどなく溢れ出し、喜びに耐えきれずに破顔した私は痛みを感じるほどに強く顔を掴む、その痛みするも感じたいと言いたげに
「帰ってこれた……俺は、俺に戻ってこれたんだぁぁぁぁぁぁ!!」
歓喜に雄叫びをあげ、天を仰いで両手を突き上げ、万歳と連呼する

そう遠くない未来に、再び絶望が襲いかかるとは思考の片隅にすらなく、俺はただひたすらこの軌跡を噛み締め、涙を流すのであった

第一話　夢とは甘美なものだよ、貴公

元の世界…あえて現実と呼称しよう。この世界に帰還してから速いものでもう半年も経ってしまった

まさに夢のような時間だった…上位者になってから忘れていた娯楽を目一杯享受し、煩わしいあの思考の瞳によって見える世界も、神秘も叡智も何もない。ただの人間として生きることの素晴らしさに最初の1ヶ月は感動と興奮で涙がとまらなかった

まぁ数千年ぶりの現実だったせいで一般常識や教養はごっそり抜け落ちてたし、俺自身が培ってきた考え方、感じ方と現実の乖離が激しすぎたのも辛かったし、不死や上位者の時に思う存分感じれた戦いの高揚は得られないし、家電製品とか使い方わかんなさすぎてまず使い方を習うところから始めないといけなかったりで正直結構きつかったが、半年もすれば慣れきってしまうもので、今では暇があればゲームをやりまくるクソガキに無事レベルアップ（？）できた

「〜〜〜♪」

上機嫌に鼻歌を歌い、身も凍るような寒さに支配された街を楽しそうに歩く。今は転生前から働いていた親戚の叔父が営んでいるラーメン屋のバイトの帰り道である

正直アルバイトなんてものはしたくねぇし、曲がりになりにも世界の王様やそれよりも凄い存在になった身としては、こんな粗末・て言い方は歪んでるんだろうが、こんな生活は嫌だ…と考えてしまう

「はぁ…」

しかし俺の心は久しく忘れていた感動ってやつで満たされてた。知ろうと思えば知ることができる。やろうと思えばできてしまう。しかもそれが例外なく、まるで積み木を積み上げるみたいに簡単に。それが上位者と言う高次元の生物の長所だが、体験した身としては刺激の欠片も無い、例えるなら味どころか噛み応えも無くなったガムみたいな空洞の人生だった

「んふふふ…！」

それに比べて、只人の人生は刺激に満ち溢れている！　知ろうと思

えば無数の知識を要求し、更にその知識を取捨選択する経験を要求する。やろうと思えば知識だけじゃない、それを活かす知性と経験を要求される。何をするにも二手間、三手間を要求される。このもどかしさに、それに何よりそれを乗り越えて達成できたあの充足感。あの喜びがどんな快楽にも勝っちまう、ほんっと麻薬何てちんけなもんじゃ味わえねぇぜこの気持ちは！　思い出しただけでもう嬉しさが止まらねぇ！　笑顔が止められねぇんだわ！

この喜びを噛みしめながら、ラーメン屋やってる叔父が所有しているマンションの俺の部屋…要は前の話で俺が目覚めた、現実における俺の自宅への帰路についた

ここで俺の直近一ヶ月で見た場合の1日のスケジュールを見てもらおう

まずは朝6時に起床。布団はそのままに真っ先にシャワーを浴びて下着と服を着替えたらさっと洗濯機を稼働させる

洗濯機が終わるまでの間にさっと布団を畳んで部屋の掃除（掃除機がけとテーブル拭き程度）を済ませ、洗濯機にかけられた洗濯物を干したら簡単な朝ごはん（主に惣菜とご飯かカップラーメン）を準備して朝食を食べる

で、所持品の再確認をしつつ身支度を整えたら、7時には家を出てバイト先のラーメン屋に8時過ぎに到着。店は11時開店するため、先に来て仕込みをしている店長に挨拶してから開店準備を手伝う。因みにだが、店は元々叔父の趣味で始めたため、席はカウンターのみ8名オンリーの狭い店であるので、準備にはそれほど時間も手間もかからず終われる

時間通りに開店したら14時半まで働き、昼の営業が終了。遅い昼飯休憩の後、夕方からの開店に備え店内の清掃と仕込みの手伝いをこなし、夕方の開店時間17時まで休みを取ったら、そこから22時までノンストップで働き、閉店後の店の片付けと明日への準備をしてバ

イトは終了。帰宅は大体２３時前で、家に帰ったら風呂に入ってさっぱりした後、適当に買い置きのカップラーメンなどで腹を膨らましたら２４時過ぎに就寝

以上が基本的な彼の生活週間である。休みの日の場合は、軽くジョギングか散歩ついでの買い物をする以外だと、家でサブカルチャーの沼に沈んでいるだけで特筆することはない。なんとも味気のないありふれた生活ではあるが、彼からして見れば刺激に満ち溢れた素晴らしい生活なのである

「はっ、この俺に勝とうなんざ４０００年は早ぇよ！」

今日もお気に入りのＦＰＳバトルロワイヤルのゲームで、激しく銃火を交える敵チームを相手に楽しそうに笑う

王として君臨していた時代にはこのような娯楽は存在せず、また共に遊ぶものもいなかった。上位者として君臨した頃は、矮小にしか感じられない人間の作る娯楽を楽しむことができなかった

「よっしゃ、どうじゃボケカス!?　これが俺様の力じゃボケェ!!」

そんな彼だからこそ、今この瞬間がどれほど尊いものなのかをよく理解していた。人として、人のままに生きることの尊さを、そしてそれを享受できる己の幸運に、誰よりも真摯に、そして深く厚い感謝を抱いていることだろう…あぁ、願わくば星の数に並ぶほどにまで願い続けたこの夢のような人生が、どうか壊れませんように…

彼が住む街には、あまり他の街には見られない場所が存在する

中華系やフィリピン系などアジア系の人間が多く集まるその場所は、地元の人間でも不用意に足を運ぼうとは思わない。そこは繁華街と呼ばれていた

繁華街にある大小様々な大きさで建ち並ぶ雑居ビルの中には、性サービスから飲食店にフィットネスクラブと無秩序に店が看板を掲

げ、それを営む人も、またそこに訪れる人のどちらも日本人には見えない者が大半であり、ここは日本の中にありながら、日本とはかけ離れた空気の中に存在していた

そんなある種異常と呼称できるこの繁華街の中において、この世のどこにも合致しない異常な惨状が広がっていた

街頭どころか窓すらもないために、星の灯りしか照らすもののない、闇に支配された路地の一角。一面を染め上げる赤色と、むせかえるような血の香り。目を凝らさずとも路地の地面は夥しい量の血の中に沈み、壁面はまるでバケツの中身を叩きつけたかのように、ただ真っ赤に塗装されている

その惨状の中心に、一匹の獣がいた。黒い体毛に覆われたその体躯は、大人の背丈の二倍以上はあろう巨大なモノ。その肉体を支えるに足る逞しい二本の後ろ足には不釣り合いな、骨と皮しかないような細長い前足には5本の指と、異常に発達した鉈に鉤爪を掛け合わせたかに見える爪を持ち、犬のように舌を出したまま荒く呼吸していた

そんな化け物の足元には、もはや元が何であったかもわからない肉塊と、それに混ざり合う布片…恐らくだが、その肉塊が身につけていたであろう衣服の残骸が真っ赤に染められていた

獣は嬉しそうに顔を網の形に歪めて目を細めると、夢中で肉塊を頬張った。獣の口から咀嚼する水音が響き、噛むたびにその顎から血や肉が噴き出て自分の身を汚すが、そんなことに頓着はしていないのか、獣は貪る速度を落とさない。あっという間に肉塊を平らげてしまった獣は、その口元を汚す血肉に然したる関心を見せることもなく、犬のように四つん這いになると手足を使い、路地の奥へと消えていった…

この惨状を、私は翌朝のニュースの特番で知った

第二話　狩人の技は、脳裏ではなく魂に刻まれる

「昨夜未明、○○県■■市の繁華街で大量の血痕が発見されました…警察の発表によりますと血の量から考えて1～2人程度の成人男性の血液とほぼ同量の血痕であり、殺人事件を視野に入れて捜査を行うとしており、近隣住民の皆様は深夜に出歩かない、一人での行動を避けるなど可能な限りの対策を…」

朝食のトーストを頬張ろうとした体が固まる。テレビに映し出されたニュースには日本においてはとても珍しい事件に関する報道がされていた

「…」

恐ろしい事件だ。しかしそんな事件ごときに反応した訳ではなく、彼は嗅ぎ取ってしまったのだ、魂に焼き付いてしまうほどにヤーナムで味わいつくした、或いは狩人に作り替えた多くの者に味あわせた血生臭い獣の香りを

「……」

だと言うのに、彼の中にあったのは諦観だけだった。燃え上がるほどの怒りも、海よりも深い絶望も無く、ただただ目の前の覆しようもない事実に対して、ただただ無感情に

「まぁ3週目が平穏で終われるわけがないって、分かってはいたんだけどな」

と、吹っ切れたように笑う彼は、おもむろに席から立ち上がる。すると、先ほどまでは寝巻のままでいたはずの彼の衣服が、席から立ち上がるまでのわずかな時間で別の服に置き換わっていた

獣狩りの夜に繰り出す狩人たちが身に着ける狩装束…その中でも隠し街ヤハグルを治めるメンシス学派に属する狩人たちが着る狩装束に身を包み、左手には血景を握りしめた彼は、血景を持たぬもう片方の手に握りしめた青い秘薬を呑むと、続いて空いた片手に暗月の錫杖を握りしめると姿隠しを唱える。すると彼の肉体がまるで水面に溶ける一滴のインクのように掻き消え、朧気に輪郭が見える程度の、しかしそれすらも気のせいだと捨て置いてしまうほどにまで自分の

気配と存在そのものを隠す
「行くか」
　まるで近くのスーパーに買い物に行くかのように軽々と決意すると、彼は躊躇なく窓から外へと飛び出した。マンションは２階なのでそこまで高くはないが、それでも地面からは５ｍは離れており、うまく受け身を取らなければ大怪我を負ってしまうことは間違いないだろう
　しかし彼は塵一つ巻き上げることもなければ、微かな音すらもなく地面に降り立つ。そして素早く錫杖を捨てる。捨てられた錫杖は瞬時に消え去り、血景を鞘から引き抜くと目の前の洋風の一軒家の屋根に飛び乗り、そのまま建物の屋根伝いに街を飛び回り獲物を探す
　目や他人を頼らずとも、獣の追跡など赤子をあやすよりよほど簡単なことである、何故ならば彼らが持つ血の匂いを嗅ぎ取れば良いだけなのだから
「……芳しい…か」
　慣れ親しんだ血の匂いに混じる獣性の、濃厚で鼻をへし折りにくるほど強烈な獣臭さを嗅ぎ取り、感じた自分の感情に低く、激しい嫌悪の感情を込めた彼の暗い声が溢れ出る
「はは、やっぱり狩人だな」
　他人事のように、しかし清々しそうにそう言った後、彼は小さく笑う。その間だけは、彼が纏う空気は柔和なものだったが、すぐに冷たく剣？なものに変わり、彼はその後１時間ほど町中を飛び回って痕跡を辿り
「見つけた」
　そして繁華街にほど近い、かつてはいくつもの工場が存在した…今はその全てが止まった、廃墟群の一角、かつては商品を保管する倉庫として使われていたであろう大型倉庫の一つに獣が隠れていることを突き止める
　彼は迷うことなく自分が立っていた高さ３０ｍはあろう煙突からその倉庫へと飛び降りる。ぐんぐんと速度を上げ、一瞬の間に屋根が眼前に迫るが、私は動揺することはなく、両手をクロスさせ頭を守る

とそのまま屋根を突き破り倉庫内に侵入、床に着地する前に回転させてキチンと足を地面へと向け、ひび割れたコンクリートの床にさらに大きな亀裂を作りながら着地する

「いた」

彼が開けた穴によって照らされた薄暗い倉庫の中に、赤暗く変色した血溜まり跡に寝むる獣の姿が見えた。獣は彼が突入してきた際の轟音で目を覚ましたのか、飛び起きると威嚇するように唸りながら彼のいる方向を見た跡、忙しなく周囲を見回している

「……」

ゆっくりと立ち上がりながら千景を両手に持ち直し、中段に構えると足を深く踏み込む。すると獣との間にあった５０ｍほどの距離を瞬きの間に詰める、足音どころか衣擦れの音一つもなく、まるで空気と同化しているかのように静かに、まるで初めからそこに立っていたかのように感じてしまうほどの凄技…いや神業を見せる

「…」

位置取りは首のすぐ左横、両手に構えていた血景を頬の横に刀身が来るように上段に構え獣の首を狙って突き込む

「ぎゃぎぃ!?」

水面に刀を沈めるように、するりと刀身が首に入り込み、まるで木の枝を切り落とすように骨を断ち切る子気味良い音に続いて、微かな水音と共に刀身が獣の首を貫通する。突然意識外から差し込まれた一撃に獣の口から微かに人間味のある、しかし明らかに獣のごとき醜い悲鳴がこぼれだす

「……！　ッッ！」

状況も分からず口から耳障りな音と共に血を吐き出しながら暴れまわる獣に対し、追撃を食らわせようと彼は左手に持ち直した血景を力任せに引き上げて上半身をのけぞらさせると、その無防備な胸部に空いた右手を全力で叩きこむ

「ッッッ!!」

皮を、肉を強引に突き破り、おそらくは肋骨であろう骨を握り壊すと、中の心臓を周りの血管ごと強引に引き千切るように、そしてなる

べく多くの臓器を、肉を破壊するよう意識して捩じり取る。獣の口から血と共に赤色の泡のようなものが吹き出し、最早獣の方向ですらも無い断末魔の悲鳴を上げ、右手を突き込んだ時よりも何倍もの大きさに広げられた胸の傷口から夥しい量の血液が肉片や骨片ごとこぼれ出す

その様を見て殺したと確信した彼は右手に握りしめていた心臓を無造作に投げ捨てると体を蹴り飛ばして血景を引き抜き、その場に無造作に放り捨てる。すると血景も錫杖同様に消え去り、蹴り飛ばされた獣はそのまま仰向けに倒れ、体を何回か痙攣させた後動かなくり、流血も痙攣しなくなってからすぐに止まる

そして彼の全身を白く、うっすらとだが自らが発光しているかのように明るい…例えるなら霧のような何か…獣の持つ血の意志が彼の中に流れ込む

「…あぁ、殺せちゃった」

全てを終えた彼は、自ら流した血の海に沈む死体を見つめながら、低く、絶望と諦観が入り混じった冷たく低い声でそう呟いた後、彼は青い秘薬を飲み、再び錫杖を手に出現させ、姿隠しをかけると自分が開けた屋根の穴から倉庫の外へと飛び出て、一度屋根に着地するとその場にしゃがみ

「…やはり、一度自らに紡いだ縁は消えぬか。平穏とは程遠い咎を背負ったものだ」

と、兜越しに額に手を当て、深いため息とともにそう悲し気に吐き出した彼は、いつのまにか彼の内心を表すように頼りなく曲がっていた姿勢を正そうと立ち上がると、家とは別方向に向かって走りだす

「……やっぱり目を背ける訳にはいかねぇよなぁ」

と、声量こそ決して大きくはないが力強く、それでいて芯を込めた声でそう呟くと、彼は目的の場所へ向かって屋根を伝う。目的はただ一つ、今生の自分が持つ力を理解すること。その為に目的の場所へと走り続ける事４０分、町外れの山の山頂付近に造られた、おおよそ３００ｍ程の広さを持つ円形の草木が取り除かれ、地面の土が露わになった広場のような場所に来ていた。広場の端にはトタン屋根の、扉

が無いタイプの車庫のような建物が3つ設置されている
ここは元々地元の林業企業が使用していた材木の集積場だった場所で、先月倒産したために放置され、山の山頂付近にあるせいで誰も来ない為、力を扱うにはうってつけの力なのである
集積場の中心に降り立った私の服装が変わる、直前まで来ていたヤハグルの狩装束では無く騎士シリーズ一式に身を包み、左手に草紋の盾を装備し、右手に銀騎士の剣を持った私は、闇の王時代に身につけた剣術をいくつか試す、そのどれもが正しく行使できていたが、自分の肉体が技術に追いつかずに振り回されていた
「くっ!?」
思わず苦渋の声が漏れ出る、突き込んだ剣を素早く捻るように押し込み、切り上げ、更にその不安定な体勢から素早く形持ちに切り替え切り払いながらステップを踏むように後ろに下がる。しかし足運びが上手くできない、重心がぶれてしまい瞬発力が殺され、威力が乗らない。とても鎧や硬い獣の皮膚や筋肉を切り裂けない
銀騎士の剣を捨てた私は次にヤーナムの狩装束に獣肉断ちとエヴェリンを装備した彼が勢い良く踏み込むと正面に飛び込み、片手持ちのまま大上段に構え獣肉断ちを地面に叩きつける。轟音と共に踏み鳴らされた地面に亀裂が走り、土塊が獣肉断ちの一撃で捲れ上がり、大量の土煙が上がる中、素早く地面から獣肉断ちを引き抜いた彼は素早くエヴェリンを放つ、弾は無いため撃鉄が落ちる金属音しか聞こえないが、彼の想像の中では初撃を背後に跳んで回避した赤いコートに花帽子とマスクをつけた狩人が正面からノコギリ鉈を手に飛び込んできたのをエヴェリンで迎撃したのだ
「っ!」
狩人は弾の軌道に合わせて体を捻りながら飛び込む事で直線のまま弾丸を回避する。が、彼はそこで獣肉断ちを変形させる。刃の各部連結が解除された事で僅かにその剣身がスライドし、彼は狩人は向けて思いっきり振り上げる。すると獣肉断ちの剣身は伸び始め、まるで鞭のようにしなり、剣身の数十倍にまで伸びた剣身が土を巻き上げるように狩人へと放たれる

「ぐぅ!?」
　しかしその伸び切った獣肉断ちの勢いを制御しきれず、前方に引っ張られた彼のバランスが崩れ、振り上げた獣肉断ちに引っ張り上げられるように体を浮かせた彼はそのまま前へと倒れてしまう。が、慌てて彼は倒れる際に獣肉断ちから手を離すとエヴェリンを持つ手を付けて倒れようとする体の支柱にしつつ倒れようとする体の勢いを制御すると、そのまま体を左回りに半回転させて勢いを殺しつつ足を地面につけてそのままもう半回転しつつ勢いを完全に殺して倒れることなく地面に立つと
「…ステータスが足りてない?」
　と、いつのまにか自分の右手に戻っていた変形前の獣肉断ちを軽く振りながらそう呟く。彼の中ではできるという確信があった。身に着けた技術と経験はどちらもその確信を裏付けていた。しかし現実として最早斬撃武器と言うよりは斧などのように潰す、叩き切ることに特化された獣肉断ちの重量に振り回されてしまっていた
「…魂と肉体の感覚がずれている?」
　ゲーム的に例えるならばステータス不足により武器の使用にバッステをかけられているようなものだが。それではなぜ自身の肉体に染み付いた技術と経験が肉体の不足を理解できたなかったのか…初めて使うような武器でもあり得ない事だが、良く扱う、それこそ自分の肉体の一部と思えるほどに使い込んだ武器の一つであるこいつを使いこなせるかどうかが分からないはずがない
「…いや違う。もっと根本的な事のはずだ……」
　そう呟きながらも、彼は再び変形させた獣肉断ちを振るう。古い時代の狩人たちを支えた仕掛け武器の一つたる獣肉断ちは、一種のマルチウェポンとして機能するために使用される
　人ならざる膂力を誇る狩人が扱うことを前提としたこの仕掛け武器の重量は何と２００kg、片手で扱うにはあまりにも重すぎる武器だが、その理由は打撃武器と斬撃武器の両立と、俗にチェーンブレードと呼ばれる特異な仕掛け武器にある。複雑かつ柔軟で、硬度と耐久性を要求する頭の悪い武器の代名詞みたいな獣肉断ちであるがその性

能はまさにピーキーと言うにふさわしいものである
　変形前の戦い方はその重量を活かして相手を叩き潰す、あるいはその斧のように分厚い剣身を利用し、相手の防御の上から強引に切り裂くことをメインにしており、最早その運用は刃のついた鈍器に近い
　仕掛けを起動した場合の戦い方はチェーンブレードにより数十倍にまで伸びたリーチと、重量からか決して安定しない、波のように揺らめく独特の機動を持つ強烈な鞭としての運用ができる。が、その実際は狩人の膂力を以てしても振り回されかねないじゃじゃ馬武器である
「…もう一度だ…！」
　変形させた獣肉断ちを横なぎに振るう。１０ｍはあろう距離まで届くその剣身の挙動に腕が引きちぎられると思うほどの激痛に思わず顔を顰め、歯を食いしばって痛みに耐えながらも腕をしならせるように引くことで、獣肉断ちの剣身の揺れに同調させることで無駄な力をかけることなく最初の動作で剣身を引き戻すとと、変形…仕掛けを解除するとため息を吐く
「やっぱりだ…」
　何度やろうとも、自分はやはりできると確信を持てていた。しかし自身の肉体は全く釣り合っていない。それはつまり
「ずれてるんじゃない。誤認している」
　本来の肉体と魂で感じ取る肉体に齟齬がある。それも違和感を感じさせないほど自然と、である。血景の時の動きが出来たのが奇跡のようなものだが、あれは特に力を要求されるようなものでは無かった。恐らく獣肉断ち（これ）と血景（あれ）の違いは人外の技術を求められるか人外の膂力を求められるかの違いでしかないのだろう
　彼はその事実に軽く絶望していた。これを直すためには己の肉体を魂の感覚と同じレベルまで鍛え上げる必要性があるためである
　少し脱線するがダクソにおける技術や経験は単なる記憶でしかない。対してブラボにおける狩人の技は魂に刻み付けられる。それは幾度も死と復活を繰り返す中で、夢に自らの意志を引き継ぐために狩人たちが編み出した業であり、たとえ死のうとも文字通り蘇る不死人

とは違い。夢を経由して現実に実態を持った自らの霊を降ろすに等しい狩人の狩り故の涙ぐましい努力であり、その技を、上位者となってから改良してダクソに置いて蓄えた膨大な知識と経験、技術を全て魂に転写させたがゆえに、彼はこの貧弱な只人の肉体にありながら積み上げたものを無くさずに済んでいるのだ

「…俺を強化しなくっちゃぁ、殆どガラクタになっちまうなぁ」

と、ため息を吐きながら獣肉断ちを放り投げる。ダクソとブラボ。両方とも特徴としては只人が扱うことを想定した武器がほとんど存在しない。いやまぁダクソに関してはそこそこあるのだろうが、手持ちにあるのはそれらを極限まで強化して属性を付与した後で扱えそうなのはおれた直剣と騎士の剣くらい、とてもではないが満足には戦えない

「…しっかしなぁ」

ソウルを使い肉体を強化する、或いは血の意志により肉体と魂の双方を磨き上げる。このどちらも実行させるために必要な火守女と人形はおらず。それを成す技をこなそうにもこの世界にはソウルと血の意志どちらも存在しない。まぁ後者は今しがた得たが、最低限戦えるレベルにまで磨き上げるには不足しているし、第一それほどの獲物が居るとはとても思えない

「はぁ…考えるのやめよ」

現実逃避気味にそう言って笑うと、彼はそのまま日が暮れるまで自分の魂と肉体の齟齬を理解しようと手持ちのあらゆる武器を振るい続けた

第三話　彼方の幸福

獣を殺したあの日から丸3日が過ぎた。その間にやったことと言えば、叔父の店や家に獣除けのお香代わりに血の意志を利用して、自分より弱い存在が近寄れない結界を張る。これで核となる陣を壊されない限りは、月の魔物だって近寄れない結界で永続的に守れるはずだ

そうしてバイトに精を出しつつ、パトロールの一環で夜町中を捜索する生活を送っている

で、今は何をしているかと言うと、久しぶりに友人から遊ぼうと誘われたのでそいつと一緒にゲーセンに来ていた。現実においてはたったの1年ぶり程度の再開であるが、2度の転生を経た俺にとっては数千年ぶりの再会に等しいもので、俺の中にあるのは再会の喜びよりも、最早時と膨大な記憶に押し流されてしまった友人とちゃんと接することができるか？　と言う純粋な不安の方が圧倒的に勝っていたのだが――

「このっ!?　このっ!!」

しかしそれは杞憂に終わった。友人と出会って、ゲーセンであらゆる種類のゲームを楽しんでいるうちに、擦り切れたはずの記憶が蘇って行く。それが本当にうれしくて、まるで失った自分が帰って来るような、そんなえも言えぬ幸福に浸れることが本当にうれしかった

あ、因みに今遊んでいるのはギルティギア…なんだけどなんだこいつ上手すぎんか!?　こっちの攻撃全部カウンターキメられるんだけど!?　んなろ負けてたまるか…！　あっ

「た☒ぁ☒ぁ☒ぁ☒ぁ☒あ☒ぁ☒ぁ☒ぁ☒ぁ☒！」

自分の敗北を告げるおっきな赤ローマ字に絞り出すように叫びながら頭を抱える俺。いやこいつ手加減って言葉を知らんのか!?　こちとらこの手のゲーム半年前に数千年ぶりに触ったんだぞ!?

「アッハハハハ！　お前弱くなったなぁ浩一ぃ？」

と、対戦していた俺の友人、さわやかイケメンで超アウトドア派を装いながらも実際は超インドア且つサブカル大好き煽り廚である、ついた渾名は「残念サブカルカス野郎」。もうあだ名一つ見ただけで分かるカスである
「うるっせぇ!?　こちとらボタン配置とキャラのコンボ把握からやり直してんだから手加減しろって言っただろ！」
バンバンと筐体を叩くゲーセンでやると下手しなくても掴まるのでやるなら自宅の壁か自分を殴りましょう俺の抗議に、一瞬だけ変に真顔になった友人の空気の代わりを敏感に感じ取れた。しまった、流石にこいつにはバレたか？
「…いやぁ～お前いつの間にくそ雑魚になったんだ？　あんまりにも余裕過ぎて片手で舐めプできちまったぞお前」
しかしすぐに普段通りに笑う友人の姿に内心で礼を言いながら、俺は自然に怒る振りをする
「バイトが忙しくて碌に出来てなかった実質初心者嬲って楽しいかてめぇこの野郎…!?」
「うん。超楽しい」
「キサムァ!!」
その後も普通にゲーセンで陽が暮れるまで遊んで、そのままマックで飯食って解散となった。その帰り道のことである
「なぁ…」
「おん？」
冬の夜は外套の明かりがあっても暗い。文字通り明かりも無い闇の中を歩いたこともある身としては、昼間と大差ないから問題はかけらもねぇけど、ふっつぅの人として生きる身の上としては友人にばれねぇように振りをしなくちゃいけないから正直面倒なんだよなぁ、なんてことを考えていたら、突然友人が俺に話しかけて来た。意識をそっちに向けたら、俺の方を見ないまま、でも少しだけ真剣な表情で前を向いている友人の横顔に、茶化せるような話じゃないな、と俺も気持ちを切り替える
「…お前さ、なんかあったか？」

その一言に私は何一つ動じない。即座に心を殺して冷たい鉄面皮をかぶせた私は、柔和に笑うと
「あ?なんだ急に・・・・」
と、尋ね返す。それに友人は軽くため息を吐いてから再び顔を上げ
「やっぱりだ。最後に合った1年前のお前は、そんな綺麗な声で喋れる奴じゃなかった」
その言葉を受けても鉄面皮は剥がれない。私は首を軽くかしげて少し怪訝な表情をすると
「ほんとに何だよ急に、俺は俺だよ。お前が言うその綺麗な声だが何だか知らねぇけど、勝手に俺に設定生やすな」
と抗議する。それに友人は小さくため息を吐くと
「俺の知る限りのお前は、誰かのために無理して笑えても、そんな風に自分の為に笑う事は出来ないやつだったよ」
その一言を受けても、鉄面皮は崩させない。巻き込めないから崩さない
「…言いたくない事なのか?」
「あぁ」
即答した。もし知れば後悔すらも出来なくなってしまう底なし沼みてぇ恐ろしい俺の人生に付き合わせる必要はないと思ったから、だからこそ俺は友人の問いに即答した。何となくだけど、こいつは引いてくれると思ったから。すると友人はため息とともに頭を下げた後、ジャンパーのポケットに突っ込んでた左手で後頭部を乱暴に掻いた後に俺に向き直ると
「辛かったら言えよ…お前が思ってるより俺はずっと馬鹿だからな」
と、真っ直ぐに俺の目を見てそう言ってくる友人に、俺は一言だけ
「あぁ、ありがと」
と短く答えた。それ以上はもう鉄面皮が持ちそうになかったから、無条件に向けられた親愛が眩しすぎて、そらを拒絶などできそうになかったから…だから俺は、そのまま逃げるように友人と別れて帰路に着いた

俺の後ろ姿を、友人は複雑な顔でじっと見送ってくれた

その夜。何もする気になれずそのまま眠りについた彼は、その夢の中で少なくとも彼にとっては狂うほどにまで見慣れてしまった、これを読んでいる方にとっても見慣れた風景と、彼だけが見飽きた光景が混在する、不気味で奇妙な世界が目の前に広がっていた

眼前に広がるのは月の魔物を殺した後の、全焼したゲールマンの家…かつて最も古くから存在した狩人の工房を模したもの…だった廃墟と、廃墟のある丘へと続く石畳の道、そして丘の斜面に沿って作られた階段式の花壇と、その隣に作られた墓地と、唯一生える巨木…それは間違いなく狩人の夢その場所である…あるはずだ

しかし明らかに違う点が一つ。それは雲一つなく澄み切った青空と、燦燦と輝く太陽が夢を照らす中、微かな波の満ち引きの音と海鳥の鳴き声が聞こえて来る

「……」

無言のまま音が聞こえる背後に振り返ると、そこには太陽の光を照り返す大海原と、その向こうに朧気に見える陸地

「…エバー……ホープ……」

そこは夢では決してない場所。前世(上位者)の彼自身が自分が死ぬための計画の為にヤーナムを作り替えた際に作った場所の名前を呼んだ。

――そう、ここは決して忘れるわけがない場所。彼が作り上げた、彼の夢の跡。存在などするわけもない彼の所業を示す場所

「何故…？」

最早上位者ですらもないただの人間の彼に、ここに干渉する術は存在しないはずなのだ。そもそも、前世で死んだ時点で全てを維持していた彼自身の死により、すべからく無に帰すはずなのに。現実として確かにこの場所…エバーホープは存在していた

「狩人様」

背後から聞こえた女性の声に思わず振り返る。そこにはまるで主

の帰りを出迎えるように、石畳の道の上に立つ人形が居た
「……」
そんな人形に対し、彼は何もアクションを起こさなかった。全くの想定外の存在であるはずの人形に対し、それに対して驚くことも、恐怖を抱くことも、また彼女が存在することに対して疑問を呈すことも無く
「戻って来ちまった…」
ただそれを本当に悲しそうに、それでいてどこか踏ん切りをつけたように笑いながら、彼は受け入れるようにそう言った。それに対し人形は顔を上げると
「はい、お帰りなさいませ、狩人様」
と、その人形らしい正規の欠片も無い瞳で主たる彼を見ながら、人形はそう言って彼に微笑みかけた

第４話　主の帰り

狩人様は、私がこれまでお世話をしてきたどの狩人様とも違う方でした

何らかの崇高な使命があるわけでもなく、ただ状況に流されていたわけでもなく、狩人様は高みに至ることを目的として、あの獣狩りの夜に身を投じました

しかし狩人様の目的を達成するには、彼自身の才能はとても足りませんでした

見たことも無い剣や鞭を持ち、見たこともない鎧に身を包み獣狩りへ向かう狩人様は、おそらく異国で相当の修練を積んだのでしょう。夢を見れなくなったかつての狩人様方にも引けを取らない強い覇気を纏った方でした。……だから気づいてしまったのでしょう。ゲールマン様が最も古き狩人であることを

「ゲールマンさん、貴方を狩人と見込んでお願いします。どうかこの私に獣狩りの技をお教えください」

膝を地面に突け、両手も地面に突け、額すらも突けるほどに深く深く頭を下げる。東方の国に伝わる土下座、と呼ばれるお願いや反省を表す姿勢を見せる狩人様を見下ろすゲールマン様は、とても複雑な表情をされていました。まるで狩人様の土下座を心底見たくないと、そう言いたげに顔を顰めながらも受け入れてあげたい、と言いたげに私には見えました

「この夜を越える術を…私に教えて下さい」

と、少しだけ浮かせた額をまた勢いを乗せて地面に突きながら、重ねてゲールマン様に願う狩人様に、等々根負けしたゲールマン様が深いため息とともに、ゆっくりと車いすから立たれました

「良いだろう…ゲールマンの狩りを、君に教えてあげよう」

そうして、狩人様は夢の中で厳しい修行を受けたのです

激しくぶつかり合い火花を散らす鎌と長剣、互いに一進一退。目にもとまらぬ工房を続ける中、やはりゲールマン様が優勢でした。狩人様も武芸を収めていたのかゲールマン様の動きにある程度ついて行

けていましたが、姿を消して隙と挙動を隠し、空中を含めた3次元、全方位からの攻撃で相手を追い詰め
るゲールマン様の狩りには対応しきれていませんでした
「ギャギッ!?」
そしてゲールマン様が振り上げた鎌の一撃を長剣で受け止めるも、既に体制を崩されていたため大樹へと吹き飛んだ狩人様は大樹に直撃し、ぶつかった大樹が大きくしなり、激しく揺れる中、地面に落下した狩人様は満足に受け身も取れずに地面に落ちて、また悲鳴を上げました
「どうした？　この程度、捌けぬようでは獣は狩れんぞ」
と、ゲールマン様が挑発します。それに狩人様は左腕がくの字に曲がって骨が突き出し、全身もボロボロの血だらけになりながら、まるで痛みなど感じないと言わんばかりに平然と立ち上がり、長剣を構えると
「オ☒ォ☒ォ☒ォ☒ォ☒オ☒オ☒オ☒オ☒オ☒オ☒オ☒オ☒！☒！☒」
と、大気すらも振るわせるほどの咆哮をあげるとゲールマン様に切りかかりました。それにゲールマン様は、とても楽しげに笑いながら曲刀を構えてその攻撃を受け止め、また両者は激しく真剣による死合いを繰り返すのです
そうして長い長い時間をかけて、狩人様はゲールマン様から認められるだけの狩人に育ちました。そしてそこから狩人様は文字通り破竹の勢いで狩りを遂行して行きました
戦った相手の技術を、技を、力を盗み、自らの糧にして目覚ましい成長を続けるその様を、ゲールマン様は獣性と理性の共存した、悍ましい獣だと例えました
「師よ、最後にして偉大なる狩人の祖よ。貴方の慈悲を受け取ることはできない」
そして獣は師にすら牙を剥きました。ヤーナムの狩装束に身を包み、月光と獣狩りの短銃を握りしめ、ゲールマン様の刃を拒絶した狩人様は、そう言い放つと短銃を構えました。それにゲールマン様も深

いため息と共に車椅子からゆっくりと立ち上がりながら狩人様にこう語りかけました
「はぁ、君が呑まれるとは思わなかったが…血か、狩りか、それともこの悪夢にか……いずれにせよその力に呑まれたものを、狩るのもまた助言者たる私の仕事だ」
　そう言って、ゲールマン様は曲刀を抜き取りました。それを見た狩人様は構えていた短銃を突然降ろしました
「……？　一体どうしたと言うのかね？　今更君が…」
「夢を覚ますために貴方を超えたいのです」
　ゲールマン様が真意を知ろうと語りかけるのを強引に遮り、狩人様が口を開きました。それにゲールマン様は大きく目を見開き、微かに体が揺れました。しかしすぐに平静さを取り戻すと狩人様にこう言いました
「夢を覚ます？　ふん、何を言うかと思えば、それこそが世迷言だ…」
「いいえ、世迷言などではありません。私は貴方を、そしてこのヤーナムを救うために、この夢に巣食うものを狩りに戻りました」
　しかし狩人様は何一つとして動じることなく、確固たる信念を持って、声こそ平静ですが強い力が、意思が込められた声でそうゲールマン様に言い放ちました。それにゲールマン様はとても悲しげな…でもその瞳には隠しきれない喜びと希望の色を持った顔をした後……それら全てを殺して狩人の顔に戻ると武器を構え直し
「断言しよう、君の覚悟は叶わない。あれには誰も敵いはしない…無駄に命を散らすことはない、私の介錯に身を委ね…」
　不意に鳴り響いた銃声がゲールマン様の言葉を止めます、音の出どころは狩人様で、短銃を空に掲げ、その銃声でゲールマン様の言葉を強引に止めさせたのです。そのまま狩人様は力強く、そして明確な怒りを込めた声質で
「情けないことを言うなよ…？　俺が知ってるゲールマンは…誇り高い狩人はそんな情けないことは言わない」
　その言葉にまたゲールマン様の体が揺れ動きました。まるで彼の心の動揺を表すかのように。そして狩人様はゆっくりと月光を肩に

担ぐようにしながら、左足を伸ばし、右足の膝を深く折ると短銃を持つ片手を地面につける極めて特異な構えを取りながら
「私…いや俺は全てを終わらせる。あんたの苦悩もヤーナムを縛る血の医療も、獣もあの魔物も。何もかも全てを…だから黙って退けよ師匠。俺はあんただって終わらせてやりたいんだよ」
そう宣言した狩人様に。ゲールマン様は初めて。初めて満足気に、まるで全てのしがらみから解放されたかのうような安らぎを得たかのような笑顔を作ると
「ふふ…あはははは！　あっはっはっはっは！　師匠に対する口の聞き方がなっていないな、神楽坂？」
と、狩人様の名を呼ぶ刹那から文字通り本気の、今まで感じたことも無い圧力をゲールマン様は放ちました。あまりの強さに花畑の草花が怯えるようにしなり、大樹が恐怖からか揺れはじめました。しかし狩人様は無言のまま構えを解きません。それを見たゲールマン様もまた武器を構え
「行くぞ弟子よ。ゲールマンの狩りを見せてあげよう」
そう宣言し、それに対し狩人様もまた
「俺の全てをかけてアンタを踏み越える」
と、宣言しました。そしてゲールマン様が狩人様へと切り込み。師弟の、最後の死合いが始まりました
「イヤァ！」
大鎌と曲刀の使い分けと、不可視の移動術を組み合わせたゲールマン様の猛攻に対し、狩人様は
「おぉぉぉぉおおおおおおおおお！」
身の丈ほどもある分厚い巨剣を棒切れのように軽々しく片手で扱い、暴風のような乱打を持って迎え撃ちます。瞬く間に１００合、２００合と斬り合う両者の戦いの余波で花畑は土ごと花が抉れ飛び、墓は吹き飛ぶ惨状となりました
「イエェ！」
そして勝負が動きました。ゲールマン様は狩人様の薙ぎ払いを膝を地面に突き、上体を大きく逸らして下に潜り込むように避けると、

追撃の膝蹴りを回避して瞬時に直上に上がり込み、掛け声と共に曲刀を振りかぶります
「ぐぁぁぁぁぁ！」
その一撃を狩人様は避けきれず、左肩から腹まで袈裟斬りに切り裂かれた狩人様から絶叫が上がります。それに勝利を確信したゲールマン様が銃を構え、そして1発の銃声が花畑に響きました。そして
「……」
ゲールマン様が狩人様の体に切り入れた曲刀から手を離し、銃を手からこぼすと力無く膝を折りました。そして同じく片膝を地面につきながらも、銃口から煙を吐く短銃を地面に捨てた狩人様は
「早撃ちはッ、俺の専売特許ですよ…？」
と、にっこりと笑う。それにゲールマン様は力無く笑うと、ゆっくりと仰向けに倒れました。その首には風穴が開いておりましたが、ゲールマン様はとても気持ちのいい笑顔で
「まさか、私の動きを読まれるとは…つよく、なったなぁ……我が弟子よ」
と、喋るどころか息をするのもやっとのはずの体で、嬉しそうに、本当に満足したと言う気持ちを表すかのように穏やかな声質で狩人様を褒めるゲールマン様に、狩人様は嗚咽を交えた声で
「…師に、めっ、恵まれ、ましたから」
と答える、マスクの動きからか笑っているのが分かりましたが、そのマスクは流れ出た涙でぐしゃぐしゃに濡れていました。そんな狩人様の様子に、子をあやすように微笑むと、ゲールマン様は震える手でそっと狩人様の頬に触れ
「後を…託すよ、神楽坂」
と、そう告げられました。それに狩人様が目を見開いた直後。夢の中でしかもはや生きられぬ。夢の一部であるゲールマン様の肉体が体の端からゆっくりと血の意志の証たる白い霧へと変わりはじめました。その様子に、目を見開いて何かを叫ぼうとして、必死にそれを言うまいと口を抑えて涙を流す狩人様
「ウィレーム先生…教え子の成長は、我がことよりも嬉しいのですね

？　私は…私は幸せ者です、もう何も思い残すこともありません…私の終わりには……勿体無いくらい、いい…夢でした」
　その言葉を最後に狩人様の頬から手が離れます。その手が花畑の中に落ちることはなく。血の意思へと変わったゲールマン様が、狩人様に流れ込みました
「う、あぁ……ぁぁぉぁあああああああ!!」
　そしてゲールマン様がいた場所をあらん限りの雄叫びと共に両手で叩くと、狩人様は泣き続けました。そして月が赤く染まりました。新たなる夢の苗床を作り出す為に、夢を、子を成す為に月から魔物が……人に血を授けた上位者が降ってきました
「……」
　それに対し、狩人様は顔の大部分がマスクで隠れているのに、その目だけで分かるほどに怒りと憎悪に濡れた顔で、無言のままに空に浮かぶ魔物を睨むと、手に持つ銃を躊躇なく向け
「降りてこいよ、糞獣。てめぇの夜を終わらせてやる」
　と、魔物に対して、狩人様はそう言い放ち。それを決戦のゴングとするように、魔物もまた咆哮を上げてそれに応えます。そうして両者の戦いが始まり
「死ね」
　激闘の果てに、狩人様は魔物を壊し。この覚めぬ夢を終わらせると言う、ゲールマン様への約束を、確かに果たしたのでした

「はぁ…」
　人形のいつもの定位置のすぐ横、石畳の階段に座り、両腕を膝の上に置くようにして手を繋ぎ、そこに顔を沈めて深くため息を吐き出

す。いやマジで…何故俺が平穏に生きることをどいつもこいつも許してくれないのか…
「狩人様…」
　んで人形はいつもの定位置で花壇のへりに座ったまま声をかけて来る。いやマジでやめて本当に、そんな慰めようとしているみたいな声をかけられても困る…
「いやもぉぉぉ・・・何で残ってんだよこのホープがよぉ…」
　いやもうマジで…何でこんなことになるんだ？　あれか？　上位者になったことが悪いんか？　それとも上位者やめるために何万人と犠牲にしたのが悪いんか？
「いやそれは悪いわ」
　うん。よくよく考えなくても自分一人の為に何万人も犠牲にしたのは常識でアウトだわ…擁護不可能レベルのアウトだわ…
「だとしても今生で普通の人間に戻ってやり直そうとしている奴にやっていい事じゃないだろぉぉぉ…！」
　思わず頭を抱えてうんうん唸ってしまう。いや許してくれ、最早人目をはばかる余裕なんてもんは今の俺には無い。だって一見平静に見えてるけどこれかなりパニクってんだよ？　分かる？　存在が無くなってないとおかしい場所に壊れたはずの人形がいて。しかも自分の意志でもないしましてや来たいとも思ってない、おまけにただの人間の俺にはとてもじゃねぇけど来る手段なんかないはずの場所に連れてこられたとしか思えない状況にパニックにならない方がどうかしてると俺は思う
「誰だよ俺をここに連れてきたのわよぉ～！」
　思わず叫んじゃうね。俺の前世の苦労なんの意味もねぇじゃねぇかよふざけんな!?　て叫んでもいいんだけど、もうそんなことする元気もないわメンタル的に…いやもう勘弁して欲しいわぁマジで。あれか？　俺は不幸になれって神様が叫んでのか？　だとしたら今生は神様を殺すって目標追加しないとなぁ
「はぁ……人形ちゃんさぁ」
「はい」

「俺がなんでここにいるかわかる？」
「私が呼び出しました」
「そっかぁ…ん？　今なんて？」
「私が狩人様を呼び出しました。狩人様に是非お会いしたいと言う方がいるので」
「ア、ウン…ソッカァ」
　もうやだ今生。神様がいるなら絶対なぶり殺しにして２４時間モツ抜き耐久の刑に処してやる…！
「で、誰なの？　その俺に会いたい人って」
「後ろにいらっしゃる女性の方です」
　そう言って手で俺の背後を指す人形に促されるがままに後ろを振り向くと、そこには銀の仮面で顔を隠した黒いドレスみたいなものを着た女性・・・・
「うわぁ…」
　どっからどう見てもダクソ３の火守女なんだけど。かぼたんなんだけどあれ
「人形ちゃん？」
「はい、狩人様」
「あの子の名前とか知ってる？」
「アストラのアナスタシアと名乗られました」
「アッ、スウ―……ソッ……カァ」
　ダクソ３衣装の初代かぼたんとか今わかんなぁよ本当ふざけんなよ!?

第5話　貴公、年貢を納める時だな

「アナスタシアなのか…？」
　目の前のダクソ3のかぼたん…の恰好をしたダクソのかぼたんであるアナスタシアに思わず尋ねてしまった。いやだってそうだろ？
　ただでさえ厄ネタのオンパレードで心労がヤバいのに自分の人生の埒外の存在が出てきたらもう脳みそがパンクする…
「ぁ…陛下、漸くお会い出来ました…」
　あぁ良かった、アナスタシアだったわ…すっげぇ深くお辞儀してくれるけどそんなことしなくていいから本当に。と言うか何でアナスタシアがいるの？
「私、裂け目を見つけて…そこから陛下のお力を感じて…裂け目を抜けたら、ここに居たのです…」
　アァ、なるほどそう言う事か。ウーラシール案件じゃな？　あれたしかマヌスが迷い込んだ宵闇を引きずり込むために開けたんじゃなかったっけ？　やばいなここら辺もう覚えがよろしくないからがばがばだぞ…と言うか何でこいつ俺を追いかけて来てんだ？
「お会いできてよかった…陛下、また貴方様にお使いできることができるだけで、アナスタシアは嬉しゅうございます」
　と、なんか艶っぽい声でそう言ってくるアナスタシアに思わず表情に現れそうになった引きつり笑いを表情筋を総動員して止める
　いや待ってほしい読者諸君、アナスタシアがこうなったのには海よりも深い事情があるんだ。頼むからアストラの直剣にスズメバチ付けてっパリィを狙ってくるのはやめてくれ…
　簡単に説明するとかぼたんは人間性の塊みたいな人外なので、そもそも生者がダークリングで不死化するって言う亡者化へのサイクルが発動しない。んで亡者は人間性を使えば戻れるので、その人間性を求めて亡者に群がられてたところを助けたのが全ての始まりだった
　とりあえずグウィンに変わる新たな王として火守女の仕事から俺の側仕えになるよう命令して保護した。んでとりあえず身の回りの世話をしてもらいながら自衛も出来るようにってことで侯爵の書庫

やらなんやらかき集めた書物を読ませて魔術、奇跡、呪術を仕込んだり、一通り武芸は人並み以上に出来たから腕をさび付かせないついでに指南したりといろいろしてたんだが
「私のような汚らわしい声を聴いては、陛下の耳が腐り落ちてしまいます」
て頑なに喋らないから本当に暇になってしまう。俺の事嫌いだったんじぇねぇかなぁとかそん時は色々考えてて、でも鍛錬とかは絶対にやめないって感じだったから良く分かんねぇなこいつ？　とか思いながら仕込めるものは全部仕込んだ。教えるついでに色々新しい魔術を編み出したりと結構充実した生活だったとは思う。…まぁ自殺したけど
いやしかし…どういうわけだ？　なんか雰囲気とか俺に向ける視線や話し声的に、あんまり嫌ってなさそう？いや嫌ってたらわざわざ追いかけて来ないか…
「…」
あれ？　おかしいな、なんか人形ちゃんがすげぇこっち見つめてる気がするんだよなぁ…？　それも怒ってる時特有の圧みたいなものを感じるのはなんでだろうなぁおかしいなぁ…？
「陛下。このアナスタシア、たとえ陛下が亡くなられ、その魂が異界へ渡ろうともこの身果てるまでお仕えしたく。どうか、どうかこの愚物をお控えください」
と、片膝をついて深く、深く頭を下げたアナスタシアはそう俺に懇願して来る
「…いや、あぁ～…」
ちょっと待ってくれ、タイム。どういうことだ？　一体なぜこんなことになる。なぜ彼女がここまで俺に忠義を見せてくれるんだ？
碌に彼女の忠節に報いたことも無ければ最後の方は文字通り雑巾よりもひどい扱いをしていたはずなのに…訳が分かんねぇ
「…狩人様は迷惑されております。アナスタシアさま、どうかお帰りください」
「ッッッッッッッッッッッッッッッッ!?（あまりの突然の言動に声す

ら出せずに息を絞り出すような悲鳴を上げる神楽坂）」
　待て待て待て待て待て!?唐突に何核爆弾をぶっぱしてんだこの人形ちゃん!!　マジでどうしたお前そんなことを唐突にぶちまけるような悪い子じゃないって言うか俺が改造した時も言語と性格とか弄ってないのに原作を唐突に粉砕するのはやめろばか!?　本当に馬鹿何やってんだお前!?
「・・・・・は?」
　瞬間。大気が凍り付いた。とても目の前にいる女性の口から発せられたとは思えない言葉は、俺の背中にひやりと何かを感じさせるほどの凄みを与えた
「ちょっ、ちょちょちょちょ、ちょっと待って待って!?　お、落ち着けアナスタシア!?　人形も急に何を言い出す…」
　と、慌てて両者の間に入ろうとした俺の言葉は、俺の体を両手で挟むようにして抱いた人形により止められる。それに虚を突かれて俺は固まり、しかしすぐに状況を理解し全身から血の気が抜きながら息をのむ
「…」
　それを見たアナスタシアの足元の地面とドレスのスカートの裾が凍り付き、彼女のスカートの半分ほどまで凍り付くとそこから発生した霜のようにも見える可視化された冷気が拡がり、彼女以外のあらゆるものが凍り付き、その冷気が瞬く間に俺の元にまで届き、俺は真冬のような肌寒さを感じて思わず身震いする中。両手の力を少し強めた人形が
「狩人様にはすでに私がおります。過去から追いすがる貴女は、狩人様の重りにしかなれません、狩人様のことを想うならばどうかお帰り下さい」
　と、更にツァーリボンバしてくる人形は、まるで自分のものだと言わんばかりに俺を引き寄せる。まるで私の者だと主張するかのような行動、と言うより言動に最早血の気が引くどころのレベルでは済まない生き地獄を味わいながら
「なるほど、これがまな板の鯉ってやつか」

等と現実逃避気味なことを考えていると、等々凍り付いた草花が粉々の氷片に砕け始め、霜どころかまるで霧のように真っ白な冷気を纏いながら、アナスタシアはワナワナと全身を震わせ、激しい感情が彼女の中を渦巻いていることを表現しており、彼女は今にも泣き出しそうな程に震えた、そして激しい感情を懸命に堪えようとしているかのように喋り出す

「わ、私は…私はッ！　陛下唯一の従者にして、唯一見えざる軍団の将！　黄泉帰りのアナスタシア!!　陛下には私が必要なのです！　へ、陛下が…陛下が私を不要などと、そのように言われるはずがありませんッッッ!!」

まるで自らに言い聞かせるかのように、最後には渾身の力を込めて左足で凍りついた石畳を踏み砕き、その両手に鎌…と言うにはあまりにもぶ厚く、長い刃を備え、槍としても使うことを想定しているのか先が細長くスピアのような刃となった、柄頭には両手にもつ武器を繋ぐ鎖のついた武器を構え、画面越しでもわかるほどの殺意を向けるアナスタシア。その殺意の圧力は凄まじく、向けられていない俺自身が身震いしてしまったほどだ。しかしそれを受けていながら人形は人形であるが故にその表情は変わらず、体に何かしらの反応が出ることもない

「……狩人様、お下がりください」

と、有無を言わさぬ圧力を込めた言葉を口から発しながら、抱き寄せた俺から手を離すとそっと俺の前に立つ人形は、いつのまにか左手に肘下から手首まで全体を腕甲のように保護し、その上に腕甲に密着するように着いた先が丸みを帯びていて、後は両辺の端が細長く伸びて、その間が正面から見ると逆三角形のように見える得意な盾らしき金属でできた、真ん中にすこし盾から浮いたナットのような形状のものが着いた仕掛け武器の一部たるチェインシールドを装備し、左手には仕掛け武器である、剣身だけで１ｍは優に越える、分厚く、ちょうど真ん中に縦に一本、まるで剣身を切り分けたような割れ目のある、とても武器としては使え無さそうな柄のない両刃の剣、フェイカーブレイバーを装備し

「狩人様にお仕えする侍女の「マリアンヌ」と申します。狩人様の平穏のため、貴女はここで狩らせていただきます」
と、人形の口から出たとは思えない、いつも通りの声、しかし力強く、そして強い決意が込められた宣言に、アナスタシアは更なる冷気の噴出による大気すら凍らせる膨大な力の噴出と、何倍にも膨れ上がり、今もなお上昇を続ける殺意をぶつけることで答え
「あぁ、なんでこんなことになっちまうんだ?」
と、俺は内心で泣きそうに呟きながら、1人と1体の一瞬即発の空気を、どうすることもできずにただ見守ることしかできないのだった

第６話　天下無双の大決戦

　エバーホープはかなり大きな島として夢を作り替えたものである。その直径は約１２ｋｍ、さまざまな施設を景観を壊さずに設置したいと言う上位者時代の彼の思いを反映した場所となっていた
　その島の中心、かつて狩人の夢と呼ばれていた場所が山頂になる、なだらかな傾斜の丘から噴火かと見紛うほどの巨大な土煙…にしてはあまりにも白すぎる煙柱、とでも言うべきものが巻き上がる
「シネェェェェェェェェェッ!!」
　有らん限りの呪詛を込めた、金切り声、と形容してふさわしい絶叫を響かせながら両手に持つ鎌を重ねるようにして振りかぶると、丘の山頂部分が文字通り抉れた地面の上に立つ、彼女の眼下でバッククラーを構えた人形…マリアンヌへ向け襲い掛かる
「…!」
　それに対し、マリアンヌは構えたバッククラーに銀弾を装填…いや使用すると表現したほうがいいだろう、彼女の外套に追加されたポケットに収めた銀弾が３つ無くなり、代わりに反対側が薄く透けて見える、鈍く光を反射する銀色の膜が盾を包み込む
　刹那、マリアンヌが身構えた瞬間、振り下ろされた鎌がバッククラーに命中する。鎌に付与されたエンチャントがマリアンヌを凍らせようと膨大な冷気が襲い掛かる。そして、丘が爆せた
　世界を揺らした。そう形容できるほどの、世界が歪むほどに強烈な衝撃波が大気をシェイクし、まだ抉れた。そう形容するレベルで済んでいた丘を衝撃波と共に島全体に拡散した白く可視化された冷気の津波が根元から粉々に吹き飛ばす
「狩人様の夢をこれ以上壊させはしませんッ!!」
　対するマリアンヌも表情こそ変わらないが、それ故に人間のように感情を剥ぎ出した叫びは余計に不気味さを、そして何より怒りを際立たせた。バッククラーと激しく火花を散らして拮抗する鎌を大きく押し出す。それにアナスタシアは素早く空中で体制を整えながら猫を思わせるような低く這うような体勢で着地する。が、その着地を狙っ

てマリアンヌはいつのまにか彼女の左手に握られていた貫通銃を放つ
「っ！」
それを刹那で見切ったアナスタシアは鎌を振るって弾丸を弾き飛ばす
「…」
そこに眼前にまで踏み込んだマリアンヌがブレイバーをアナスタシアの心臓を狙って突き出す
「っ！」
それにアナスタシアは反射的に体を右にずらして脇を通過させながら、鎌を手放し開けた左手で脇に挟み込むようにして右腕を掴むと、そのままの姿勢から無理やり腰を捻らせ、マリアンヌの脇腹に蹴りを放つ
「！」
それをマリアンヌは自分から右腕を曲げて体を密着させ、距離を詰めると脇腹に届くよりも前に、バッククラーでそれを受け止める。が、凄まじい脚力が生み出す一撃はサイの突進に等しい威力を発揮し、片手で、しかも踏ん張りも効かせていない防御では受け止め切れるわけもなく、差し込んだ腕ごと深々と脇腹に足が捩じ込まれる
「ッあぁ…！」
強力な一撃にくの字に曲がった彼女の体から衝撃波が発生し、口からこぼれ出すような悲鳴が上がる中、マリアンヌは封じられたまま右腕の関節が外れることも厭わず、無理やり体を捻って持ち上げると、そのままアナスタシアの首に両足を回しつつ右手からブレイバーを離して絡みつくアナスタシアの左腕を掴む
「っ!?」
人体から発せられるわけもない、まるではめ込んでいたものがあっさりと外れるような小気味良い音と共に行われた荒技にアナスタシアは目を見開く、そのまま掴んだ左腕を支えに一瞬にして両足でホールドした首を締め上げながら全体重を乗せて吊り上げるようにアナ

スタシアの体を持ち上げながら体を倒す
「ッッッ!!」
息もできないアナスタシアの悲鳴と共に背負い投げのように体を持ち上げられたアナスタシアはそのまま地面に叩きつけられる
「ギャハァ!?」
あまりの衝撃に肺の中の空気が押し出され、呼吸ができずに大口を開けたまま固まるアナスタシア
「殺す!」
それに対し、地面にアナスタシアを叩きつけながら、そのアナスタシアの体を足場に飛び退いていたマリアンヌは、本来歩いたよりも明らかに方ひとつ、ふたつ分下にずれた左腕を抱えながら追撃を加えようと接近する
「っ!?」
が、刹那に感じた命の危険に即座に足を止める。その右手には捨てたはずのブレイバーが握られており、油断なくバックラーに銀弾を消費して膜を再展開させ、倒れたままのアナスタシアから猛吹雪が放たれた
「っ!?」
防御で呑み込まれる。そう判断した彼女は素早く跳躍して攻撃を避ける。すると下半身と背中を自分から流れ出した血で赤く染めあげたアナスタシアが、地面から生やした氷柱を使って自らの体を中空に浮かべ、両手にあの鎌を握り締めている
「認めましょう、貴女が陛下の侍女に相応しい強者であることを」
マリアンヌを見下ろすアナスタシア、彼女の背中にはまるで天使のような翼が6つ形作られていき、彼女の纏うドレスがどんどん白く凍りついていく
「ですが、陛下の御心をまるで我が事のように騙り、あまつさえあのように自らの所有物であるかのように抱き寄せるなど言語道断。そのような無礼者の存在を許すわけには参りません!!」
その宣言と共にアナスタシアの纏う冷気が臨界を迎えた。まさにハリケーンの如き冷気の渦はこのエバーホープそのものを飲み込ま

ん勢いで増大していき、そしてアナスタシアが左手に持つ鎌を掲げると、拡大し続ける冷気の渦が鎌の一点に収束し、一本の白い柱が生み出される。その柱は文字通り店を貫き、激しく渦巻く冷気はさながら雲のような密度にまで集まる

「この一撃をもって、その大罪を注ぎます!!」

勝負を決めると宣言するアナスタシアに対し、人形はブレイバーの仕掛けを作動させると逆手にブレイバーを持ちなおしてその柄頭をバックラーのナットのような突き出た器具に当てる。すると剣身の割れ目から剣が開き、１８０度開くと本来の柄とナット部分を覆いかぶさるようにして新たな刃が現れる。そしてその刃は更に真ん中と根元が変形を始め、正面から観ると逆さにしたＭのような形状に変わる。これこそが彼がマリアンヌの為に手ずから作り上げた専用の仕掛け武器「星海の奔流」である

「…狩人様の願いも分からず、いたずらにその願いを踏みにじる貴女こそが罪人ですッ！」

と、鋭く睨みつけながらそう宣言すると星海の奔流が彼女の怒りに反応するかのように、逆Ｍ字型に変形した刃の内側が発光を始め、それと同時に冷気による大気の振動とは別ベクトルの、純粋な力の奔流により激しく揺れ出す大気の中、マリアンヌはあらん限りの力を込めて左足を地面にめり込ませるほどの力で踏みしめると、ゆっくりと、まるで自分の全ての力を集めているかのように左手を中腰で振り被り、刃から文字通り世界を照らす太陽のごとき眩く暖かな光が彼女の全身を覆いつくすどころか、半径数十メートルを光で包み込んでしまうほどの、あまりにも圧倒的なエネルギーを一点に収束させた

「アアアアアアアアアアアアアアアア――――!!」

それに対し、必ず勝つと宣言するようにアナスタシアの咆哮が響き渡る。そしてその咆哮を合図として冷気がその形状をほころばせる、渦は乱れに乱れ、何時バラバラに露散してもおかしくないのではないかと思ってしまうほどに荒々しい回転は、その規模と密度をさらに膨らませ、青黒い閃光がその渦の周りを幾度も走り、世界はアナスタシ

アの一撃に恐怖するかのように暗雲で空を覆いつくす
「…ッ！」
対するマリアンヌも星海の奔流から発生していた、あれ程に巨大な光が全て剣身の中に収束し。その結果、文字通り彼女の服がトル気味に近い位置から徐々にミキサーにかき混ぜられていくように粉々に分解され、消滅して行く。いやそれどころではない、破壊された大地の残骸が、未だ健在な大地…島そのものが崩壊を始める。解放されていないエネルギーの本の一遍、1パーセントにも満たない極小のエネルギーの余波だけで世界が崩壊の危機を迎えているのだ
「……ッ！」
そしてアナスタシアが先に動いた。彼女は突き上げた鎌を更に荒々しく、そして何よりも力強く天へと突き出し
「ッ!!」
対抗するようにマリアンヌの星海の奔流も収束された光が剣身の中心に浮遊するピンボールほどの大きさの光球まで圧縮される

「黄泉送りッ!!」「ジェノサイドバスターキャノン!!」

同時に技名を叫ぶとアナスタシアは鎌をマリアンヌへと振り下ろし、マリアンヌもアナスタシア目掛け星海の奔流を振りかぶる。そして天から万物を氷結させ、その圧倒的な暴風により粉微塵に粉砕する必滅の嵐が崩壊し始めていたエバーホープごとマリアンヌへと襲い掛かり。マリアンヌ星海の奔流から解放された光球が一体いつ変わったのかも見えないほどの、文字通り刹那でマリアンヌの全身の数十倍の直径を持つ巨大な光線へと変わり、それはアナスタシアの放った嵐と衝突する
そして、両者のぶつかり合いは世界を光で塗りつぶした

「これ、俺のことちゃんと考えて戦ってるのかなぁ」
その頂上決戦を、冒頭の爆発で海に吹き飛び、手頃な木片にしがみつきながら空を見上げて戦いの行方を見守っていた彼は、この世の終わりを可視化したかのような両者の激突を見守りながら、彼が発した呟きごと光に塗りつぶされた

第7話　夢壊れたり

世界が割れる。よく小説で技の強さなどを表す際に使われるありがちな言葉の一つ…てぇほどでもないだろうがそこそこ目につく表現の一つだと思う

その表現ってのは例えば大地が割れるだろか、大気が震えるだとかそんな表現になるだろうが、そんなものは俺に言わせれば単なる惑星規模での話で、言っちゃ悪いが程度の低い話だ

じゃあ俺が言う本来の世界が割れるってどういう意味だって話だよな？　そりゃ

「今目の前に広がってる光景だよ」

後ろから抱きかかえられながら未だ空中で激しく切り合う二人を見ながら誰に対してかもわからないが話しかける用に吐き捨てる

眼前に広がるのは文字通り大気を吹き飛ばす強烈な衝撃は起こす轟音と共に、砕け散った氷片がまるで雪のようにきらきらと降り注ぐ幻想的な光景を作り出している、互いにボロボロになりながらも未だ呪詛を吐きあい殺しあう彼女らと、その奥に見える世界に穿たれた真っ黒い穴が見えた

その穴は例えるならば絵画を引き裂いたかのように、世界の板部を切り抜いたかのように何一つ光も色も存在しない闇一色の空間は、エバーホープが存在していた場所すらも大きく侵食しており、水底に空いた空と同じ巨大な闇の中へと、轟音と共に海水が滝となって落ちていく光景は、例えるならばモーセの海割りだろう

この光景こそがまさしく世界が割れる…いや破けた証に他ならない。２人の過剰なまでの火力に、世界の耐久が持たなかったのだ

「これ、直せるかなぁ……」

彼の口からため息と共に自然と愚痴がこぼれ出る。因みにだが彼の口からこぼれ出た愚痴は、未だ戦闘を続ける２人からの逃避であったことはここに明記しておく

「直す前にあそこで戦ってる子達を止めなきゃダメでしょ」

背後から突然声をかけられる、くすくすと可愛らしい笑い声と共

に、やや落ち着いた印象を感じるが、しかしまだ多分に少女のあどけなさを残した、そんな印象の声だ
「無理だろ、とてもじゃないがあれをどうにかするのは今の俺にできる案件じゃねぇ」
　お手上げと言いたげに両手を上げて肩をすくめ、そのまま水面に手を放り出す。水面にあたった両手がパシャんと水しぶきを上げる
「でも2人が戦う理由はパパにあるんでしょ？　だったらパパが止めるっきゃないでしょ」
　と、再度少女の声が背後から聞こえてくる。それに彼は深いため息を吐きながら「やりたくねぇ～」とぼやきを上げる。それを見たのか後ろから再びくすくすと笑い声が聞こえてくる。それに彼は短く溜息を吐いた後に
「笑い事じゃないぞ、お前にとっても命の危機だろうが」
　と、後ろを見ながらそう話しかける。するとそこには少女の声の主。彼が作り上げた夢の住人の1人が彼の体を抱き抱えていた、そして今まで彼に話しかけてきていた声の正体だった
　彼女の名は「シヴーチ」髪先は粉雪のような明るい白色だが、真ん中は薄らと透けた水色、残りは全て少し緑の色が濃い青緑色の海藻をイメージさせる独特の、パーマのように盛り上がった肩にかかる程度の長髪を持ち、うっすらと日焼けしたかのような肌を持ち、程よく引き締まった腰と貝殻のブラジャーにより形を整えられた豊かな胸を持ち、下半身は水色の鱗を持つ魚と、ここまでの説明でわかるだろうが彼女は人魚である
　アクセサリーとしては両手首に金のブレスレットと、貝殻と紐でできた腰飾りを身に着けている
「マリアンヌお姉様はお父様のことになったらすぐポンコツお人形さんになっちゃうから、こうしてれば大丈夫！」
　と、シヴーチは彼を父と呼び慕いながら、更に体に密着させるように抱きしめる。その直後に一際大きな衝撃波が轟音と共に響き渡り、その衝撃波にまるで波のように大気が揺れ動いて世界が歪む
「はぁ……そろそろ止めなきゃ世界が砕けるか…」

疲れたと言いたげに項垂れた後、声をかけた結果どうなるのか、想像も出来ない地獄を予感しながら意を決して2人に向かってやめろと口を開いた彼の眼前でひときわ大きな衝撃波が起きたのだった

結論から言うが、2人の戦闘は死ぬ気で割って入ったらあっさりと終った。いやそこであっさり止まれるなら普通に殴り合う前にまず俺に尋ねてみるとか、そう言う思いがあっても良かったんじゃねぇか？　って思ったんだけど

「だっ、だって…！　へ、へいっか、は…わ、わたっ、しを…お、お、おいて行かれたっ、ではありませんか…？」

と自分と人形の返り血、そして幾つもの傷によりドロドロに汚れた顔をぐしゃぐしゃにしながら泣き崩れた彼女の嗚咽交じりの叫びに何も言えなかった。いや…確かにそうだ。付き従い、慕ってくれた彼女のことを欠片も考えることなく、俺は俺の都合で勝手に死んだ

「で、です、から…わた、私は…」

もう聞くことに耐えられなくて、俺は強引に彼女の体を抱き寄せ

「もういい。すまなかった…」

と謝罪する。俺自身の罪のはずなのにそれを直視することが出来なくて、俺はそこから逃げるために彼女に贖罪の言葉を紡いだ。だせぇとしか思えない、そんな人間だから自分のことだけを考えて、他のこと全部投げ出して逃げ出せるんだ。なんて俺の声で、俺の背後から俺を非難する声が聞こえて来て酷く気分が悪くなってくる

「許せとは言わない…すべて話す。その上で、まだ俺を慕ってくれるなら、俺の従者として、また仕えてくれ」

そして、事ここに至っても全てを彼女に湯駄目ねて逃げ道を作るこの浅ましさに。行った端から胃酸の苦みが口の中に広がるくらいの嫌悪を感じながら腕の中で陛下、陛下と俺を呼びながら、まるで俺と言う存在を噛みしめるように、ひな鳥が親を求めるように必死に俺にしがみつき、出来るだけ、1㎜でも側にいたいと訴えるように強く、強く抱きしめる彼女の姿に、俺は無言でその背を抱きながら、殺してやりたいほどの自己嫌悪に陥っていた

あの後アナスタシアとマリアンヌに話を聞いたが俺がこのエバーホープに来た理由はわからず、てっきり自力で来たと勘違いしたらしい。その時は流したが俺の中に俺以外…つってももうやめてんだが、他の上位者がなんらかの干渉をした可能性が出てきて割と詰みゲーの香りを嗅ぎ取っております

「はぁ…やってらんねぇ」

んで今いるのは夢で言うと使者の居た噴水みたいな場所…に俺が作った海に繋がる海中トンネル付きの小さな池のほとりにあるベンチに寝転んでおります。因みにアナスタシアとマリアンヌの2人は現在進行形で世界の修復と俺の帰還方法を探すために協力してあれこれしてもらってる最中で、只人の俺には何もやれることがねぇのでこうしてパンクしそうな心身の回復に努めてるわけですよ

「・・・ふぅ～」

大きく息を吸って、胸のつかえと吐きそうなくらいに腹に溜まった自己嫌悪と共に吐き出す

正直な話、彼女たちを置いて死んだことに対する後悔は微塵もない、俺は俺自身の意志であのゴミみたいな世界から逃げ出した。あの世界で生き地獄を味わうことに耐えられなかった

だが、そう割り切っているはずなのに、俺の頭ん中をぐるぐると「あの時彼女たちを捨てたのは間違いだった」なんて哀れみが鬱陶しいぐらい渦巻いてて本当に気持ち悪い

「…チ、あ☒ぁ☒～☒～☒～☒！・☒！・☒」

余りの気持ち悪さに口から情けない喘ぎが零れ出る。何故こんなに苦しんでんだ俺は、いまさら何に対して苛立ってんだよ。何が原因で自己嫌悪してんだよ…

意味が分からねぇ、てめぇのことなのに、何もわからねぇ今のこの状態が本当に心の底から気持ち悪い

彼がそのような事を考えていると、不意に彼の顔に少なくない水が被せられる

「ぶぇ!?　ゴボ!?　ゲホッ！ゲホッ！」
突然のことに自分がおぼれたと錯覚した彼は手足を激しく振り回しながら、気道や鼻に入り込み、満足に呼吸できなくなった彼はあまりにも暴れすぎてベンチをひっくり返してしまい、その下敷きになる形で地面に落ちてしまう
「ガハッ!?　あぁぁ…!!　ぐあぁぁあ…!?　あああああああ!!」
倒れた拍子にベンチの下敷きになった彼は水をかけられた際にもろに目にかかってしまった影響で視界すらも奪われ、地面に叩きつけられた痛みの原因すらも分からず、情けなく悲鳴を上げ、涙、鼻水、唾液に汗に水を吸ってドロドロになった地面の土の影響で顔どころか全身ドロドロのぐちゃぐちゃに汚しながら暴れまわり
「あぁぁぁぁ!!　あ!?　あ、あぁ…」
漸く痛みもひいて自然に開くことのできた視界に広がる地面と花壇に気づけたおかげで、自分がおぼれていないと言う事実に気づいた俺が、未だに入り込んだ水の影響で痛む鼻、喉や胸のせいで激しくせき込みながら、不意に池の水面にこぽこぽと気泡が割れる音が聞こえて来る
「……？」
不思議に思った彼は、まだ痛みを引きずっているのか数回せき込みながら水面に浮いてくる気泡を眺めた後。何かに気づいたかのように少しその瞳が大きく開き。その直後に微かに歯を食いしばったのか頬が引きつり、眉間にとても深いしわが出来たかと思うとベンチを片手で持ち上げながら立ち上がり、元の位置に戻しながら空いている片手で仕込み杖を取り出し、仕掛けを発動させると数回頭上で振ってしなりを付けると、まるでフィッシングの様に仕込み杖を気泡の浮かんでくる地点に向かって叩き込む。細く軽やかな風切り音と共に水面に細い縦線を引いたような小さな水飛沫が起こる
そのまま細かに杖を動かした彼は、目的のものを見つけたのか素早く仕込み杖を綺麗に円を描くように回すと一気に引き上げる。すると水面に黒い大きな影が見えた、かと思えば次の瞬間には勢いよく引き上げ、入りとは打って変わって凄まじい水飛沫が巻き起こり、池の

周囲を水浸しにしてしまう
「いてててててて！　きゅ、急に何するんですかお父さっ!?…まぁ……」
　出血しない程度にギリギリを見極め、体に食い込ませるように仕込み杖で雁字搦めに拘束されたシヴーチが痛み…もあるだろうがばつが悪いとでも言いたげに少し困った印象を受けるように顔を歪めながら抗議を上げるも、彼が発するあまりにも強すぎるプレッシャーと人目見ただけで最高潮に機嫌が悪いことが分かるくらいには苛立ちと怒りを隠そうともしない俺の姿にか細く消えていく
「何してんだお前？」
　明らかに不機嫌そうに圧を込められた声色の問いかけに、シヴーチはまるで刃物を背に突き立てられたかのような、そんな感覚に陥ってしまいながら引きつった笑みを作り
「あ、ははは…いや、お父様があんまりにも見るに堪えないから。つい喝を入れたくなっちゃって・・」
　しかしその瞳と声に一切の怯えの色は見えない。それが余計に彼の逆鱗を撫で上げ、神経を苛立たせる。それは彼の体から発せられるプレッシャーと、歯が大きく見えてしまうほどの怒りの形相に如実に表れていた
「どういう意味だ」
　怒りを押し殺しているためか抑揚の少ない小さな。しかし聞くだけでシヴーチの信管を締め上げるような圧力を込めた問いかけに、シヴーチは震えながらもこう言った
「あのアナスタシアとか言う女はよくわかんないけど…お父様、私たちのことを道具だって思ってないでしょ？」
　その言葉に彼の心が大きく揺らいだ。余程効いたのか僅かに体が揺れ、それ以上に激しく視線が荒ぶる中、シヴーチはやっぱりだと言いたげに目を細め
「お父様。だとしたらそれは間違いだよ。私たちはお父様の目的の為の。死ぬための道具、いくら死んでも換えがきく使い捨てのティッシュみたいなもの」

紡がれる言葉の一つ一つが、彼の心を抉り、激しい自己嫌悪を生じさせる。彼はシヴーチの言葉を強引に否定した
「違う！　俺はお前たちを生み出した！生み出したんだよ!?　生み出したのなら責任を取らなきゃだめだろう？　例えお前たちが俺が死ぬために生み出された使い捨てる人形だとしても、今の俺にとっては…！」
　大切な命だ。そう叫ぼうとした彼の言葉を、今度はシヴーチが引き継ぐ形で止める
「大切な者だから？　やめてよお父様。私たちはそんなことであなたに苦悩してもらうために生まれたんじゃない。お父様の枷となるために生まれた訳じゃない」
　それは本心からの言葉なのだろう。涙をにじませ、悔しそうに顔を歪めた彼女の口から紡がれる言葉は、声こそ小さいが確かな意志が込められていた
「私たちはお父様のお役に立つためだけに生まれた道具、お父様が使う狩りの得物と同じで、ただそれだけの為に生み出されたもの。それを死ぬ前の上位者（おとうさま）は理解していた。でも今のお父様は違う。人間の、低い次元のものが持つ感情（ゴミ）と道理（不純物）で間違ったことを考えてる…そんなものを、私たちは求めていない」
　その言葉で、彼は自分が本当に取り返しのつかない間違いをしていたことに気づいた。生み出した命に責任を持たねばならないなどと言う人の傲慢に囚われ、生み出したシヴーチたちの存在意義を冒涜していたと言う事実に気づいたのである
「ッ……！」
　思わず吐き出しそうになる胃液を無理やり飲み込み、今にも倒れそうな自分の人間らしさ（弱）を呑み込んだ彼は仕込み杖を持つ手を微かに動かす。すると拘束が緩んでシヴーチは池の中に落下し、また水飛沫が上がる。が、直ぐにシヴーチは肩から上を水面に出して彼を見上げ
「すまん。どうやら少しばかり寝ぼけていたらしい」
　そして、そう自分に声をかけた彼の…いや、上位者としての父の片りんをその気配に垣間見せた目の前の半端者を、喜びと期待に満ちた

笑顔で見上げ
「いいえ…いいえ！　お父様、ご帰還をお待ちしておりました」
と、畏まった仕草で恭しく頭を垂れるシヴーチは、そう言って目の前の半端者を歓喜を以て出迎えたのだった

第8話　狩人の矜持　導入

「……つまりこのエバーホープの管理権限は俺からマリアンヌに切り替わっているのは確定したが「エバーランド」については不明と…」
　晴天の空の下、焼け落ちた工房跡の、何故かかなりの部分が焼け焦げていながら原型を保った木製の床の上に円を作るように座り、俺はマリアンヌに尋ねる
「はい、狩人様。私自身、目覚めたのはつい最近のことで、まだエバーホープの全機能の把握すらもできていない状況にあります…」
　と、マリアンヌは少し申し訳なさそうに少しだけ頭が下がる。それに俺は腕を組んだままで、マリアンヌの方を見ながら
「何もわからねぇってことが分かっただけでも収穫だ。これでこの世界にお前を与え、俺をここに連れてきたやつは少なくとも月の魔物…無貌のあれ並みの上位者である可能性があるってことだ」
　そう後頭部を左手で雑に掻きながら心底から嫌そうにそう呟く。いや正直案件としては相当ゴミなんだよな…なんたって俺にはブラボとダクソ分の経験値が全部入ってる。おかげで肉体さえ追いつけば月の魔物だってノーダメ栗本余裕なんだが、肝心の肉体を鍛えるために必要な血の意志もソウルも無いわけである。流石にゲームでもないのに初期ステで戦えるほど馬鹿でもMでもないからごめん被りたいんだが…
「こんなことならソウルや雫で無駄に凝った武器なんか作るんじゃなかったなぁ…」
　いやマジで、上位者時代に俺を殺しうる存在にふさわしい武器が必要だ、とか頭の悪い事言って全部錬成しちまった…いやでもカッコいい武器に仕上がったし、試作品やら完成品のオリジナルは全部手持ちに残してあるから無駄ではない…ない・・は・・ず・・・・
「陛下、それでしたら、解決策がございます」
　と、そう言っておもむろにアナスタシアが立ち上がり、それに釣られて全員の視線が上がる。そのまま立ち上がると彼女はドレスのスカートを摘み、少しだけ上に引っ張る。するとスカートにより隠され

ていた彼女の純白のショースにより守られた細い足が露わになる。それは彼女が今まさにスカートを摘み上げた様子と相まり、そのエロい…

「…!」

思考が足に吸い込まれそうになっていることに気づいた俺は慌てて頭を振る。やばいやばい自分の従者…それも一度こっちから身勝手に捨てた相手にエロいなとかマジで正気か俺!?

「…」

「へぇ〜…」

マリアンヌは気づいているのかどうか分かんねぇけどじっと目をつぶったまま動かないからこの際放置するけどシヴーチ絶対気づいてるよ!? ここに来るために用意した水で満たされた桶に浸かって、その縁に手を置いてにやにやとこっちを見ながらそんな声を上げるとか絶対わかってるだろこいつ!?

そんなことをかんがえているとアナスタシアのドレスのスカートからいくつかの白い火の玉見たいなものが落ちてきて、それを見た俺は大きく目を見開く

「そ、それ勇者のソウルか!?」

玉の大きさと光と強さ的に間違いなく勇者のソウル…いや、光的にもっと上の

「いいえ陛下、今落としたのは全て偉大な英雄のソウルにございます」

アナスタシアの言葉に思わず頷きながらやっぱりか、と言葉をこぼす。いや正直こんな上位のソウルがまだ残ってることに驚きだ。闇の王時代は徹底的にソウルの収穫と浪費で叛逆や下剋上を企てようとした不死どもが力をつけれないようにしてた関係で、もう残っていないとばかりに思っていたが…

「これは私が倒した異国の英雄達のソウルです陛下。戦働きの報酬にといただいていたものですが、今の状況ならば陛下に使っていただくことが最善であると判断しました」

そう言ったアナスタシアに俺は思わず顔を顰める。彼女和の言葉で思い出したが、俺に並び立って戦場を戦う彼女に報酬の一つもない

では他の功労者にも渡せなくなるのでねじ込んでいたやつがあったはずだ
「だけどそれは…」
アナスタシアのもんだ、確かにそいつがあれば俺の問題は解決とは言えないが劇的に改善される。だが一度は捨てたはずの彼女からそんな望外な施しを受けるわけにはいけねぇ、俺にそんな権利があるはずがねぇ…
「いやっ…。わ、分かった。ありがたく使わせてもらう」
その否定の言葉を飲み込み、俺は作り笑いを浮かべてアナスタシアに礼を言う。今の自分の考え方自体が彼女達にふさわしくないことを理解しているから、俺は精一杯彼女達のために演技をするよう心がける
「……ありがとうございます。それではさっそく強化の準備に入りますね」
と、俺が使うと言ったことで表情を明るくしたアナスタシアはそう言ってこの焼け跡から外に出ていき
「…まだまだですけど、戻ってきてくれましたね、お父様?」
と、ずっと目を閉じたまま会話を静観していたマリアンヌの横で此方を見定めているかのように目を細め、ニヤニヤと楽しそうに笑うシヴーチの言葉に、俺はアナスタシアの後を追おうとゆっくりと立ち上がり
「そんなもんじゃない」
と、シヴーチの方を見ることなくただそれだけを言うと
「マリアンヌはこのままホープの機能を調べるついでにシヴーチを池に返しといてくれ。シヴーチはエバーランドがあるかどうかを確認するついでに他の子たちを探して来てくれ」
と、2人に命令する。それに初めて目を開いたマリアンヌは立ち上がると
「畏まりました。狩人様」
と、恭しく一礼し、俺はそれに頼むよ、と声をかけてからアナスタシアの元へ向かおうと焼け跡を出る

「…お姉さまは良いの？　お父様があんなに弱くなっちゃったこと」
俺の姿が消えるまで頭を下げていたマリアンヌを見上げたシヴーチがそう尋ねる。それにマリアンヌはシヴーチの浸かる桶を持ち上げながら
「狩人様は何一つ変わっておりません、あの方は…ただ元に戻っただけです」
と、シヴーチの問いにそう答える。その時シヴーチはマリアンヌのその何一つ動くことのない表情が、少し物悲しげなものに変わったように感じてしまう
「……じゃあお父様は私たちからしたら、もう他人なんだろうね」
と、父としての片鱗を見せてくれたあの時の俺の姿を思い浮かべながらマリアンヌにそう言ったシヴーチの表情は、普段よく笑い、周りを揶揄い楽しむ彼女らしくないほどに元気のないものだった
「いいえ」
それを歩みを止めたマリアンヌがハッキリと否定する。彼女にしては珍しく、とても強い感情が込められている強い声質には微かな怒りと、寂しさが込められていた。それにシヴーチは姉と慕う女性が見せた感情の起伏に驚き。そして
「あっ、あのお方は…狩人様は……我らの父であり、私の…主様です」
生き物ではなく。その機能すらも無いはずの彼女の目に、まるで涙のように赤い水が溜まっていた。その水は例えるなら無色透明な水の中に一滴だけ血を混ぜ込んだかのように、淡く薄っすらと朱の溶け込んだその水が、彼女の心を表すかのように頬を伝う
「……ん、そだね。ごめんよお姉さま」
その姿があまりにも居た堪れなくて思わず目を逸らしてしまったシヴーチは、下げていた視線を前に向けると、そう小さく答える。そしてそのままマリアンヌは無言のまま歩き出し、２人はその後一言も会話する事なく焼け跡を後にするのだった

そして場面は切り替わりここは本来なら墓場へと続く石畳の道の緩やかなカーブ…から丘の下へと向かう分かれ道を少し進んだ先にある、狩人とその仲間たちが泊まるために用意した武家屋敷をイメージしたお屋敷の中庭に来ていた

中庭は日本庭園を丸パクリして作られていて、俺たちはその真ん中でソウルによる強化を行おうとしていた

「それでは陛下、ソウルによる強化を行います」

不死人の共である篝火を灯すために必要な螺旋の剣が握られていた

え？　これはダクソ３のアイテムだろって？　ばっかお前初代から変わらず篝火はあるし、なんなら初代でグウィン王が始めた火継ぎが延々続いてるだろ？　つまりこの螺旋の剣を含め、火継ぎに関連する儀式に武器防具アイテムに果てはモンスターに不死人まで、全部グウィン王率いる火継ぎの勢力が作ったものな訳なので、当然そいつらを皆殺し（竜の恥さらし除く）にして闇の王になった俺はそう言ったアイテムを幾つか回収しているし、儀式に関しても書物などの形でその内容を詳細に記させる事で失伝を防いでである。この螺旋の剣も同じだ

「これよりソウルの儀を行います」

アナスタシアがそう宣言するとともに、地面へ鋒を向けるようにして両手に握る螺旋の剣のグリップをしっからと力を込めて握り直す。すると螺旋の剣の鋒から仄かに火が灯る、それはまるで燭台の蝋燭のように儚げで小さなものだが、それはゆっくりと刃をなぞるように登り始め、そしてあっという間に螺旋の剣全体が炎に包まれる

「……」

当然炎に包まれた剣を握るアナスタシアの両手から前腕までがドレスごと炎に包まれるが、まるでその体や服が燃えるように炎が伝播していくのに服や皮膚が焦げ付くことはなく、また彼女自身も炎に触れてなどいないかのように平然としたまま、とうとう炎は彼女の体全体を飲み込み、激しく燃え盛るが、まるで炎を衣服のように纏ってい

るかの如く、彼女の表情は変わらない。その身は身につけた衣服すらも焦げ付かない
「火よ、全てを照らし、闇を祓う火よ、その輝かしき力を持って、この者に祝福を…！」
　言の葉を紡ぎ、剣を突き下ろす。地面に突き刺さる瞬間、燃え尽きた焚き火の跡が地面に出現し、その山頂に突き刺さると、灰の小山と灰になりかけた炭を切り分ける小気味よく、甲高い音が一瞬だけ響く。そして剣の炎が焚き火に燃え移り、まるで息を吹き返すように内側からゆっくりと燃え出した炎が顔を出し、そのまま剣の炎の全てを吸い込んだ焚き火は、まるで生きているかのように炎を絵の具か何かで表現したような濃い赤色の…例えるならば布のような形状の何かが剣の周りをぐるぐると回るようにして天へと伸びて、剣の倍ほどの長さでその伸びが止まる。そしね吸い取られた剣から火が消えるが、アナスタシアの前身は未だ炎に包まれていた
「不死のお方。呪いを受け、篝火に魅入られしお方。どうかそのお手を、その身に積まれしソウルを持って、研鑽を」
　その言葉と共に、炎に包まれた両手を広げる彼女に、それまでひたすら跪いたままだまだ俺は広げたままの左手をゆっくりと螺旋の剣の柄頭のすぐ上に持ってくるように差し出し、右手を胸に当て、頭を垂れる。すると人知れず俺の左手から最初は微かに、微風で書き換えてしまいそうなほどにうっすらと軽い煙とも、霧とも見えるような何かが焚き火…いや螺旋の剣と火守女の力により篝火となったそれに吸われていく
「研鑽を、我が身に呪いのサインを祓い、新しき火を焚べる強き意思を授けたまえ」
　俺もまた呪文を紡ぐ。それに呼応して白い煙と霧とも取れる何か…俺の体に蓄えられたソウルがはっきりとその白い姿を捉えられるほどに濃く、そして勢いもまた激しく篝火へと注がれ、そして蛇口を閉めるかのように突然左手からソウルが流れなくなり
「我らが偉大なりし父グウィンの名の下に、汝に火を…暖かな火の光が与えられんことを……」

最後にアナスタシアが呪文を紡ぎ、篝火が一層強く燃え上がると、パキン、と炭が割れて破片が俺の足元に落ちてくる。その破片がまるで氷のように溶け出し、マグマのように黒ずみ、端が赤く発熱した何かに変わると、そこから一瞬にして俺の身長よりも巨大で、激しい炎が現れて俺を包み込む。その炎の勢いに押されて立ち上がってしまうが、その動きに反して俺の口から悲鳴が上がることはなく、パニックなどで倒れたり、手足を暴れさせると言ったこともなく平然と立っていた

炎の勢いは激しく、俺の体は激しく燃え盛る炎に埋もれて消えてしまうが

、すぐにその炎に変化が起きる。まるでスポンジに吸収される水のように、俺の体で燃え上がる炎が体の中に沈み始めたのだ。沈むと言うよりは吸収、と表現しても良いかも知れない

「よし、終わったな」

服にわずかな煤すらもつかず、無傷のまま炎の下から現れた俺は、見下ろした両手をしっかりと閉じたり開いたりして確認した後、そうアナスタシアに話しかける。それに俺と同じく炎の消えたアナスタシアが広げた手を自分の前に重ねるようにして当て、俺の方を見ながら

「お疲れ様でした、陛下」

と、俺を労ってくれる。それに俺は体の状態を確認しようとその場を軽く飛びながら

「少し体の状態を確認するから、ここで待っててくれ」

と、お願いするとアナスタシアは静かに一礼して畏まりました、と言ってくれるのでそのまま地面を蹴って、屋敷の反対側にある練習場へ向かう

直前距離にしておおよそ１２０ｍの距離だが、ジャンプひとつで軽々と踏み越えた俺は軽やかに演習場に着地する

演習場の基本は４００ｍ四方の土の地面があるだけの平野だが、備え付けてある装置を使って自由自在に地形を変えれると言う特性を持っていて、自動修復機能もあると言う優れものである

「試してみるか」
物足りない…が、強化する前とは比べ物にならないほどの力が体を満たしている感覚に思わず喜色の笑みをこぼすと、まずは初歩的なロングソードにカイトシールドを装備し、覚えている通りの方を試す
「ふっ！　はっ！」
良く手になじんだ得物を振るう。エバーホープに来る前に試した時とは違う。自分のこれまで蓄積し続けた知識と技術に、肉体は完全とは言えないが充分追いついている。現に１０分近く激しく動き回っているにもかかわらず息すらも上がらない時点で、目覚ましい成長を遂げていることを実感できた
「良し…！」
確信を持てた俺はそう決心を付けるとやヤーナムの仮装束に着替え、武器も獣狩りの短銃と獣肉断ちに持ち替え、まずは片手で変形前の獣肉断ちを振るう
「くっ!?」
まだ重量に引っ張られてキレのある動きとは言えないレベルだが、それでも前と比べれば泥土の差と言えるほどに扱えるようになっていた
「おらぁ!!」
重量を活かし、体全体を獣肉断ちを持つ左腕の振り卸に合わせて捻るようにしならせ、更に飛び掛かることで勢いと速度をプラスして叩きつける。大地が文字通り粉砕され、地盤の一部が衝撃で隆起する。が、叩きつけた瞬間には柄を素早く持ち変えながら勢いを殺さずに空中で転転のように回転させ、腕力と遠心力でむりやり地面から獣肉断ちを引き抜き、着地すると同時に方手持ちのそれを追撃で相手の脳天に食らわせることを意識して振り下ろす
「ッ！」
そこで素早く態勢を整え、相手の聖歌隊が放った仕込み杖の刺突を獣肉断ちの仕掛けを発動させ、剣身をめり込ませたまま柄を引きつつ右手を地面につけて左斜めに上体を逸らして攻撃を回避すると両足の脚力と右手の筋力に物を言わせて逆立ちしながら右足を曲げて膝

裏で相手の肘上あたりを挟むとそれを軸に体を回転させつつ残る右足で腕を挟むと全力で力を込めることで無理やり肘から腕を引き千切る

「シャラァァ!!」

さらにこの間に獣肉断ちの仕掛けを解除することで。柄に戻ろうとする獣肉断ちはめいｒこんでいた地面から脱して元の鉈へと戻り、そのまま逆手に持ち直した獣肉断ちの先を鈍器代わりに相手の頭に直撃させ、頭蓋を破壊しつつ地面に叩きつける。着地際には千切った腕を挟んだまま屈んだ姿勢のまま着地する

「ふぅぅぅぅ…」

実際には逆立ちしたところまでしか出来なかったが、しっかりとしたイメージトレーニングの中での一連の動作を現実でもできると確信できた俺は、深呼吸しつつ更に武器の多重切り替えによるラッシュを繰り出す

グレートソードを片手で叩きつけ、避けた敵に右手のスピアを突き出しつつ、グレートソードから手を離して体を回転させ、空いた右手で変形後ルドウィークの聖剣による薙ぎ払いを行う。といった具合に、多彩な武器を即座に召喚し、更に投げ捨ててもデメリットなく再使用可能と言う俺の長所を最大限に発揮した攻撃を繰り返す

「グゥ…!?　はぁ…はぁ…ウォォォォォオオオオオオオオオオオオ!!」

激しい、などと言う言葉ではとても形容しきれぬ破壊の暴風。とでも言うべき暴力を巻き起こす俺の表情は今にもその場に倒れて吐いてしまうのではないかと思えるほどに苦しそうで、酸欠になりかけているのかその顔は薄っすらと青い

「おっ、っ!?…くっ!　ォォォオオオオオオオ…!」

にも拘わらず絞り出すような雄たけびと共に攻撃を繰り出す俺の顔は、現実へと転生した初めての火、帰還を喜び涙したあの時とは別種ながらも、心の底からの歓喜に満ち溢れた。そして何よりも獰猛な。まるで獲物を追い詰めることを楽しむ狩人の如く冷酷で、暴力的で、無慈悲な笑顔をしていた

「できる…!!」
したいことができることの、その何よりも代えがたい喜びを、俺は噛みしめるように獲物を振るった
この事が、このすぐ後に俺を救う事となる

第8話　狩人の矜持　前編

闇夜。それは文字通り陽の光が地平の彼方へと消え去り、地平を埋め尽くす人の光が付きと星の輝きを打ち消し。大地を暗黒に閉じ込める時間。しかしことこの現代日本に置いて、闇夜においても人は悪意や害意に襲われることは少なく。まさしく平和と言ってよい世界となっていた

「はぁ…！　はぁ…！」

そんな世界の一角で、その世界に似つかわしくもない、右手で肘から下を失い、着ているくたびれたスーツもボロボロに切り裂かれて血だるまになった中年で小太りの、少し人相の気持ち悪い男が、その気持ち悪い顔を更に醜く恐怖に歪め、泣き喚きながら必死に何かから逃げようと走っていた

「クソッ！　クソッッ!?　お、俺が一体何したって言うんだよぉ…？」

余りにも理不尽に過ぎる命の危機に男はなぜ自分なのかと悪態を吐く。しかしそれで事態が好転することは無く。不意に男の右足がまるで棒切れと化したかのように男の意思に反して動かなくなり、体勢を崩した男は無様にも地面に倒れてしまう

「ぐあぁぁぁぁ!?　ぁぁぁぁ・・・!!」

前身に走る痛みと、感覚もないのに激しい痛みだけを鳴らし続ける右足を抱えてうずくまる男、彼が抱える右足には生々しい銃創から真っ赤な血が流れだしていた。勢いも激しく既に倒れた男の周りに水たまりができ始めている

「ひっ!?　ひぃぃぃぃ…!!」

そして痛みにもだえ苦しむ男の耳に、ガシャン、と言う金属の靴音が響く。それに溜まらず悲鳴を上げながら音のした方を見ると、そこには男をここまで嬲り続けた騎士が立っており、男はたまらず悲鳴を上げ、動かない足を庇う事も忘れて騎士から背中を向けると地を這うように逃げ出す

騎士はそう呼称されるとおり全身を中世ヨーロッパの騎士鎧に身を包み、腰にはスカート。肩にはマント…であるが、遠征用の外套と

しての機能も持ったものを身に着け、その兜はまるで車両止めのコーンにも似た円錐状の特異なもので、夜を照らす街灯の光により際立つその特異な外見が不気味さを際立させる。その姿は間違いなく処刑隊の装備一式である

「…ヒヒ」

その兜から、下品な笑い声が零れる。そのまま肩幅に足を開いて少し前傾気味に構えを取ると同時に、騎士はアスファルトがひび割れるほどの脚力を発揮し

「あ、ぁぁぁぁあ、あああああああああああああああああああ!?」

背後から響き渡る牛の大移動の様な轟音に、死の予感を感じた男は泣き叫び

「ヒヒャッハハハハハハハハハハ!!」

と、狂ったように笑いながら迫る騎士は、泣き叫ぶ男の声をその歓喜で塗りつぶすと、手に持っていた月光を振るい、男の胴を真ん中から横一線に、下のアスファルト事えぐるように切り裂いた

「えぇ～…以上が多発している惨殺事件に関する報告となります」

ここは俺が住む町にある警察署内に設置された合同捜査本部にて、１００人を超える動員された警察官たちはそれぞれのチームごとに集めた情報を捜査会議にて発表していた

事件は一ヶ月前、繁華街で起こった猟奇殺人事件発生と同時期に起こった事件である。この猟奇殺人事件は彼が第二話にて殺した獣が引き起こした事件であり。この猟奇殺人事件自体はその後起きていないが、その翌日から夜の２２時から深夜１時の間を狙った惨殺事件が発生した

被害者は全員人間が行ったとは思えない方法によ殺害されており、

具体例としてワイヤーの様な細長いもので両肩を切断され、熊並みの大きさで、熊の１０倍近い爪をもつ動物に襲われたかのような腹の裂傷とか言う日本どころか世界中どこ探しても街中で出来るとは思えない殺された方をされた被害者が凡そ１６人。全員がなぜか人気のない路地や道路で殺されており、更に現場には必ず被害者のものと思われる血痕が数十ｍから長い時で３００ｍ近い距離に渡って続いているなど非常に不可解な事件であり。警察は昨日から１５００名の増員を行い、市内全域を２４時間体制でパトロールするなど厳戒態勢で犯人の逮捕に向けて動いている

「…犯人に繋がる物証は見つからないか…」

報告を受ける県警本部長はそう重々しい雰囲気と共にそう言って目をつぶる。その落胆した様子に対策本部内にはどんよりとした重たい空気が伝播するが。それも無理はない

今回の惨殺事件は前述したとおり非常に不可解な事件だ。と言うのもこの惨殺事件の前日に起きた猟奇殺人事件と同じく犯人は人間がしたとは到底思えない殺し方をしているのに目撃証言無し、犯人に繋がる物証無し、防犯カメラなどの電子的な情報にも欠片も映らないと言う。何か大掛かりな組織が全力で隠ぺい工作をしているのではないかと勘繰りたくなるほどにまで。そう不気味と形容していいだろう。そのレベルで何も掴めないのだ

マスコミが連日報道して世間の関心も高まり、地域住民からは一刻も早い事件の解決を望まれる中、捜査は碌な進展もなく暗礁に乗り上げており、対策本部としても袋小路にハマってしまったかのような、そんな絶望感に侵されつつあった

「先輩、これまずい空気なんじゃないですか？」

対策本部として使用される巨大な解説室の端で、上着を椅子に掛け、背もたれに体を預けて天を仰ぐ刈り上げた短い紙をワックスで固めた、強面ダンディーと言った風貌の中年刑海の「海田次郎（かいだじろう）」に、彼の部下として今年から配属された新人警官である黒髪ボブカットで、知的な雰囲気をしながらも少し表情が硬くて怖いと評判なメガネ刑事の「雨祓（あめはら）なぎさ」が海の方を軽く揺らしながらそう小声で尋ねる。

その表情は少し不安げなものであり、彼女もこの惨殺事件の捜査員の1人である
「あ？　んぁぁぁ～～……」
　それに天を仰いでいた海田は間の抜けた声を上げて正面を向くと、右手で口元を抑えながらあくびをかきつつ胸を大きく広げるように体を伸ばす。その様子にまた寝ていたなこいつ!?　と怒気を強めたなぎさは、小声ながらも強い口調で
「ちょっと先輩!?　なんでそんな呑気にさぼってるんですか！　危機感を持ってくださいよ!?」
　と、全くいつもの調子と変わらない先輩にうんざりしながらもそう注意する。それに海田は鬱陶しそうに眉を顰めると
「うるっせぇなぁてめぇは相変わらずよぉ？　ぴーちくぱーちく小鳥かなんかかよ…」
　悪態をつきながらもシャツの胸ポケットから取り出して涙を拭う海田。そのいつもと変わらない、不真面目が人間を装っているかの様な態度に深いため息を吐くなぎさ
「で、なんだっけ？」
　涙を拭いながら終えた海田の質問になぎさは今日何度目かもわからないうんざりとした表情を隠さずに見せると、この上司に対してぶちまけたい罵詈雑言を全てため息に変換して吐き出すと
「今回の事件ですよ、合同捜査本部が立ち上がって一月ですけど、犯人の手がかりひとつ見つからないなんて異常すぎませんか？」
　と、彼女は恐らくだがこの場にいる全員が大なり小なり抱いている疑問を尋ねる。それに海田は膝をテーブルにつき、手で顎を支える様に姿勢を変え、顎をしゃくりながら
「たしかにな。３０年この街で刑事やってるが、こんな事件は始めてだ」
　と答える。それになぎさは少し不安げな表情で
「こんな事件、わたしたちで解決できるんでしょうか？」
　と操作会議で今まで話されたことを簡潔に纏めていたノートへと視線を落とすと、少しだけ震えた声でそう尋ねてくる

「さぁな」
　それをバッサリと海田は切り捨てる、まるで他人事の様にあっさりと言い放つものだから、なぎさは信じられないと言いたげな表情で海田を見た後、彼を睨むと
「そ、そんな無責任に…!?」
　と、海田を責めようとする彼女に対し、その言葉を遮る様にして海田が彼女の方を見ながら
「３０年、この仕事を続けてやばい事件には何度も出会った」
　と、突然語り出す。その内容が自分の質問に関係しているのかもしれない、そう考えたなぎさは口を閉じて海田の言葉を聴く態度をとる
「その中で惨殺事件（これ）には劣るが凄惨な事件に出会うことは何度もあった。解決できたものもあったが、できないものもあった。こいつは…」
　そこで海田は言葉を区切ると、両手を頭の後ろで組んで背もたれに体を預けながら大きく息を吐く
「…」
　その横顔は平然としていたが、なぎさにはまるで自分の気持ちを落ち着けようとしているかのような、そんな無理をしているように感じられた
「理解ができねぇんだよ。どうやったらこんな事が出来るのか考えもつかねぇ。……ハッキリ言って、不気味すぎる」
　そう言い放つ海田は、なぎさが見たこともないほどに恐れを見せていた。微かに眉間に皺を寄せ、表情を強張らせている程度で、とても彼女が驚愕するほどの恐れがある様には見えないが、彼女は確かに海田の恐怖を感じ取ったのだ
「今までのホシはな、その背景はともかく手段は人間の範疇で収まってやがったんだ、それが…今回のやつはどうよ？」
「鑑識曰く、害者は「何百キロって重さの鈍器を棒切れみたいに振り回せるゴリラ以上の化け物」らしい。人間の範疇で考えていい相手じゃない」
　断言する海田の言葉に、なぎさは自分でも気づかないうちに生唾を

飲み込んだ。初めて彼女に見せた海田の恐怖は、なぎさに伝播し始めていたのである
「俺は心底怖い。得体の知れない化け物であるこいつが怖い…」
　微かにあった眉間のシワは深く刻まれ、海田の視線は自分が座るテーブルの上に置かれた捜査資料に向けられる
「なぎさ。お前も覚悟だけはきちんとしとけよ?」
　そして唐突に釘を刺す。刺されたなぎさは、海田の声に込められた圧に思わずびくりと肩を震わせる。それは突然声をかけられたことに対して、と言うよりは海田の雰囲気に当てられ、より強い恐怖と不安を抱いてしまったためだろう
「…」
　なぎさは海田から視線を離して俯いてしまう、海田からはその表情は読み取れなかったが、結局この日は彼女が海田の言葉に応えることは無かった

第８話　狩人の矜持　中編

…冷たい。まるで真冬に暖房もつけずに裸で部屋にいるみたい…
どうして私の世界は横倒しになっているのだろう？　周りは瓦礫と赤い…液体と炎で変わり果てた姿に変わっていた。さっきまで一軒家が立ち並ぶ住宅街の一角だったのに…
「あ…」
目の前に何かが倒れて来た。耳が無いのか音がよく聞こえない…何だか見たことある人の気がする…
「あ…う…」
自分が今どうなっているのかが分からない。生きているのか確認したくて動こうとするのに、体が全然言う事を聞いてくれない
「何だよアンタ！　そんなコスプレしてそんな武器持ってるってことは俺と同じラッキーボーイか？　最高だよなこの力！　これがあれば何でもできるんだぜ!?」
何とか動こうともがいて（動くよう体に命じるだけで一㎜も動けていない）いたら、急に私の後ろから誰かの声が聞こえてくる。とても嬉しいことがあったのか声は弾んでおり、明るく快活な印象を受ける若い男の声だ
「もう喋るな。お前はここで俺が殺す」
何かが爆発する音が聞こえた。まるで頭から全身に力が巡って行くかのような感覚と共に、微かにだが自分の体の感覚が戻って来る。そして、自分に対して向けられたわけじゃないはずなのに。殺されたと、そう錯覚してしまうほどにまで強い殺意を込められた宣言と共に、私の視界は火花に満たされた

1時間前。エバーホープ
ほのかに青い光を放つランプに照らされた地下階段を下りる3人の人影。その正体はマリアンヌ、俺、アナスタシアの3人だ。進む順番は名前の読み上げ順である
前々回から3日後、漸くエバーホープの全機能を把握したマリアンヌが俺が用意したこの場所と他の世界とを繋ぐ…いわば出入り口と言うべき施設…「連絡門」を発見し、現地への帰還の目途が経ったため、俺達はこうして連絡門へと向かっているのだ。因みにだがエバーホープの管理運営の為にマリアンヌは待機、シヴーチもエバーランド捜索任務があるのと外見でアウトになり、俺の側仕えとしてアナスタシアが付いてくることになった
で、この連絡門は俺が上位者時代に作ったもので、用途は狩人の素質のある人間を拉致するために作った俺の子どもが自由に出入りできるよう片手間で造ったものだ
原作のブラボであればこんな仕様は必要ないんだが、俺がエバーホープとエバーランドを想像する際に作った特殊な経緯から必要になったってわけだ。その経緯についてはまた別の機会に話そう。んで、今は漸く連絡門のある場所にまでたどり着いていた
連絡門はフランスにあるエトワール凱旋門をモチーフに、継ぎ目も無く、微かな引っ掛かりも無いほどに綺麗に磨き上げられ、光沢を放つ3本の石の円柱が台形の底面を上にした屋根部分の支えをしており、円柱の根元から上の屋根部分まで幾本もの石性の棘のようなものが絡みついており、屋根には左からはワーウルフ、ドワーフ、ゴブリン、オーガなど他主張で雑多な剣や槍を持ち、皮鎧や腰巻の身など貧相な装備で雪崩のように突き進む軍勢と、右側には統一された武器と鎧を身に纏い、整然と隊列を整え前進する人間と思われるものの、軍隊が争う戦場と思われるものが掘り込まれており、そして連絡門は引き戸のようにスライドして左右に開くタイプ
の2枚扉で、まるで炭を塗ったかのような漆黒の、艶やかな光沢を放つ金属製の分厚い扉により閉じられていた

そしてそれが収められた部屋はこの連絡門（高さは１０ｍ　横幅８ｍ）がちょうど収まるサイズの長方形の箱型の、壁面、床面、天井全てが洋館色で、石柱とのアンバランスさと相待って一種の不気味さを演出していた
「ではこれより連絡門の開門作業に入ります」
と、部屋に入るなり私に向き直ると、マリアンヌは私にそう告げると恭しくお辞儀してくるので、よろしく頼むと答える。そして彼女は顔をあげるとすぐさま連絡門へと振り返り、両手を門へと掲げる。すると円柱に巻き付く棘が光始め、それと同時に扉の中心に２重円が現れ、その２重円の中に検索と言う小文字が一定間隔で書かれており、その２重円は左回りに回転しており、その内側、扉の大部分を埋めるほどの巨大な「開・準」と言う二文字が現れる
俺はその一連の変化をじっと見つめていたが、ふと自分のすぐそばに控えるアナスタシアを横目でちらりと振り返る
「…」
アナスタシアはいつものドレスに仮面のいで立ちで、表情にも普段と何か変化があると言う訳ではなく、沈黙を保ったままだ
「・・・・・」
そんな彼女を見つめて、俺はここに来る前に、彼女と話した際のことを思い出す
そう、俺は３日前、ソウルのによる肉体強化と、その肩慣らしを終えた後、彼女に全てを離した。俺がなぜ自殺しようとしたのかを、その後のブラッドボーン世界への転生と新たな上位者として、自らが死ぬために何をしたのか、そしてその理由の全てを
「へ、陛下…そ、それでは私はっ、私は…私はッ！　陛下にとてつもない重荷を再び背負わせてしまったと言うのですか…？　そ、そんな…」
そう言って激しく狼狽えるアナスタシアの姿に、俺はそれを否定してこう話す
「もう今は普通の人間で、過去のことは過去として俺は割り切っている。だからお前が俺の傍に居ようと俺は重荷に等ならないし、不要だ

なんてことも思わないよ」
反吐が出た。要約すれば捨てた女をゴミみたいな言い訳で拾おうとしている最低のクズ人間だ。内容も杜撰で、本当に彼女をもう一度従者にする気が在んのかって突っ込まれても何も反論などできない。…あぁそうだよ、出来ないはずなんだ…こんな小学生の言い訳以下の落書きみたいな言葉が彼女に響く訳がないはずなんだよ。でも、でもわかるんだ
「彼女は俺に必要だと言われるだけで救われる。俺を縋ってくれる、俺に仕えてくれる」
当たり前のことだろう？　誰が彼女を、只の火守女を決戦兵器として都合のいい肉人形に作り替えた？　俺だ、俺がどこまでも都合よく従ってくれるだけの存在に作り替えたんだ。あの時は駒としか思ってはいなかったから
「へ、へいか…、ッ…陛下ッ！」
俺の言葉に呆気にとられ、うわ言のように俺の名を、只の畜生にも劣る悪辣な暴君を呼ぶ。まるでひな鳥が親に縋るように、俺の足元に這いつくばったアナスタシアが、俺の足に縋りつく。必死に、捨てないでほしいと、どのような扱いでも良いから側に居させてほしいと泣きじゃくるその姿に、俺はとてつもない嫌悪感を感じ
「ッ!?」
思わず背を丸めてその場にうずくまろうとする体を維持で押さえ、右手で口を塞ぎ、歯を噛み砕かん勢いで固く口を閉ざして込み上げた吐き気を飲み込む。今更だ、あぁそうだ全てが今更過ぎる。アナスタシアの激情を見て。シヴーチからの告白で気づきもしなかった所業を突きつけられた。自分がただただ怖くなったんだ
だって、だってそうだろう？　自分の目的のために命を弄んで好き放題した挙句、鼻をかんだティッシュみたいに使い捨てる自分が、かつての自分を同じ存在だと思いたくなかった。拒絶したいとおもってしまった。人間の感性の全てが過去(俺)を否定する。それら全てが本当に惨めで滑稽な。文字通り只人の足掻きだと過去(俺)は嗤うだろう
「当たり前だろう？」

精一杯取り繕い、ボロボロの仮面を被って微笑みかける。必死にしがみついていた彼女が俺を見上げ、俺は動きを止めた彼女の両肩に手をかけ、次の瞬間には引きはがす。両手に掴まれた彼女の口から拒絶されたのかと、反射的に悲鳴が上がる彼女を抱き寄せる

「今度はずっと一緒だ。俺が死ぬその時まで、俺の唯一の従者として、俺の傍で仕えて欲しい」

あさましく口から紡がれる甘言。寿命なぞ存在しない不死の従者に「俺が寿命で死ぬまで仕えろ」、なんて厚顔無恥に過ぎる。殺されたって文句の一つも言えやしない

「はい、はい!! 陛下の為に、今度は絶対に失敗しませんから! 今度こそ完遂して見せますから!?」

必死に言葉を紡ぐ。自分が必要とされるために弁明する彼女の姿はあまりにも痛々しい。俺が一方的に捨てただけのはずなのに、なんで謝るんだよ…なんで謝れるんだよ。縋れるんだよ俺に…? そう考えれば考える程彼女にすら怒りが湧いて来そうになってしまう。お前やマリアンヌたちが居なければ俺はこんなにも苦しまずに入れたのに。と

「ッ!!」

嗚咽の声をかみ殺すし、寸前でせりあがった嫌悪感と自責からくる吐き気を飲み込む。愚か過ぎて自分を殺したくなる。、どこまで自分勝手に、惨めになれば気が済むんだよ俺は!?

あぁそうだ。俺はどこまでも嫌っている。俺の過去の全てを、それに付随する彼女たちも…なのに、なのに俺はどこまでも俺の為だけに傅こうとする彼女たちの行為に甘えたいなんて、都合のいいなんてレベルじゃない。目の前のえさを好き放題貪りたいと飼い主に吼える犬猫と同じか、それ以下のゴミクズだ…

「あぁなんでかなぁ…俺、人間に戻れて本当にうれしかったのになぁ」

もう、嬉しく思えねぇよ。そう…俺は内心で吐き出しながら、涙ながらに自分を売り込む彼女を受け入れるのだった

「陛下…？」
「ん？　いや。何でもない」
　思考の海にハマっていた意識がアナスタシアからの呼びかけで一瞬のうちに干上がる。俺は咄嗟に仮面を被ると平然と嘘をついて彼女を安心させる
　ここまで来ちまったらもう覚悟を決めるしかねぇ。一度目は見捨てちまったが今度こそは…今度こそは最後まで守って…
「あ？」
守る？　どうして？　何故？　俺はいったいい　ま　な　に　を　・
・　・　・

「狩人様？」

「」

今何を考えたんだ俺？　心配そうにマリアンヌが俺のことを見てて、そのすぐ奥には目の前には扉が開き切って、何もない暗闇だけが見えている連絡門

「いや、何でもないよ、多分、あぁきっと大したことは考えていないさ」

そうだ、何も覚えていないけど、きっと大したことなんて考えてねぇ。だってさっきまで感じてた苦しさを感じていないんだからきっとそうに違いねぇさ

「…そうですか」

…なんかちょっとこっちを見つめてるマリアンヌの雰囲気がいつもと違う気がする…あれかな？　ぼ～っとしてたからかな？　だとしたらまずいな…とりあえずもう帰るんだし別れの挨拶はしねぇとな

「連絡門は俺の家と繋ぎっぱなしにしておいてくれ。定期的にこっちに顔を見せるよ。苦労を掛けてごめんな」

俺がそう声をかけると、マリアンヌは

「私の役目ですから、お気になさらないで下さい。ご帰還をお待ちしております、狩人様…」

と恭しくお辞儀してくれるマリアンヌにお礼を言ってから、アナスタシアに声をかけて連絡門を通る

通ると一瞬にして自宅の玄関に立っていた。相変わらず何かアクションを挟まず直通するのは芸がねぇってか…少し、いや正直初めて使ったのと相まって知っててもビビっちまった

「ここが陛下のお住い…ですか」
きょろきょろと俺の後ろでアナスタシアが少し港…何と言うか、興味があるのだろうが、そわそわと浮ついた感じが少し垣間見える表情で自宅の玄関と廊下をきょろきょろ、なんて擬音が尽きそうな感じで首を左右に振って見ていた。く、なんだよ可愛いじぇねぇか…!?
「少し狭いが、2人で暮らす分にはちょうどいい広さだ。ま、色々戸惑うだろうが…」
と、そこまで言いかけたところで突然竜が方向を上げたかのような、体の芯に響く音と振動が俺たちを襲う
「ッ!?」
その音に俺とアナスタシアは俺を先頭にして駆け出し、窓からベランダに飛び出す
「これはっ…!?」
そこに見えたの昼間の、それも現代日本の住宅街に見えるはずもない。まるで爆撃を受けたかのように真っ赤に炎のカーテンが燃え盛り、轟々と黒煙が空へと立ち昇る
「これっ!?」
そして更なる衝撃に俺は驚愕の声を上げた。その理由は獣と並んで飽きるほど鍵なれたあの香り…狩人が徐々に血に酔い始めたことを示す、濃厚で、鼻の曲がりそうなほどの悪臭をかぎ取ったからだ
「アナスタシアッ!!」
隣に控える従者の名を呼ぶ、焦りからかその声量は大きかったが、それだけで全てを察したアナスタシアは鎌を召喚し、俺もヤハグルの狩装飾に着替えるとルドウィークの聖銃とクラーグの魔剣を出現させるとベランダの手すりを踏み越え、向かいの一軒家の屋根に降り立つと、そのままアナスタシアを従え、燃え盛る火の海へと跳ね駆けて行くのだった

第８話　狩人の矜持　後編その１

平和な町は一変して、混乱の渦に呑み込まれてしまっていた
道行く人々は天を焦がす黒煙に言いようのない不安に襲われ、あるものはその不安に押しつぶされてしまい、黒煙を見上げて立ち尽くし、あるものはその光景を野次馬根性で撮影してＳＮＳに投稿し、あるものは自らの目的に逃避してその場からの逃走を図る
そんな中でも、警察や消防など、この非常時に対応しなければならない者たちは、混乱と不安に激しく揺さぶられながらも、市民を守る盾としての矜持で自らを奮い立たせて黒煙の出処…現場へ急行する
そんな騒然とした街の中、青い秘薬により姿を消した俺たちもまた、屋根から屋根へと飛び移りながら現場へと急行していた
「くそ…！　原因は何だッ!?」
思わずそう吐き捨てる。表情は険しく、息は荒れて、集中できていないのか加減ができずに飛ぶ度に屋根を踏み砕いてしまう

ダクソの時も、ブラボの時も、その世界から逸脱したものに遭遇したことは無かったってのに!?　どうしてここにき(現実)て起きちまうんだよ!?
「陛下！　気を鎮めてください！」
アナスタシアの忠言に、俺は今更自分が取り乱していたことに気づく。深く深呼吸して気持ちを落ち着けながら力をセーブすることを意識しつつ、屋根を踏み抜くことなく移動し続ける。だが
「……くそっ！」
彼の疑問は解消されない、ダークソウル、ブラッドボーン共に彼が内心で疑問に思った通り原作を逸脱したことは起きなかった。大雑把にまとめるならば原作以前の年代で生まれたダークソウルならば本編に欠片も影響のない歴史の進み方をしたうえに、彼自身が過去に行った数々のシナリオぶれいくと言うべき原作への介入行為も全て失敗に終わってしまっている
次にブラッドボーンの世界、こちらは転生時点ですでに本編に突入

していたため前と比べることはできないが、ヤーナムからの脱出などと言ったシナリオブレイクに類似する行為は全て失敗している
最後にこの2回の転生で共通していることだが、本編突入後の行動に制限はなかったものの、例えばドラクエ要素が混ざるだとか、そういった著しくゲームの世界観を破壊するような変化は起こらなかったのだ
「たまには分かることが起きてほしいなぁ!!」
今までの転生と同様の法則が当て嵌まるなら、こんな事態が起きるわけがないのだ。なんせここは現実の俺の世界で、超常、異常は空想でしかないのだから。しかし今回はその法則が完全に壊れていた、燃え盛る炎が発するさまざまな悪臭に紛れ、血に酔った狩人が発する特有の…鼻腔を擽ぐる芳しい獣の香りがその何よりの証拠であり、俺の脳内には答え等出る訳もない何故？　と言う問いで埋まっていた
「陛下ッ！」
そんな俺の焦りを感じ取ったのだろう、アナスタシアの呼びかけに俺は漸く自分がもう火元の近くにまで来ていたことに気づく。慌てて頭を振って思考を掻き消すと、俺は目の前の5階建てのマンションの屋上へと飛び乗り、屋上の端まで移動すると、設置されたフェンスを両手で掴んで火元を見下ろす
依然として黒煙を吐き出し続ける巨大な火災の範囲は、推定だが数百メートルにわたって続いているだろう。ここまで近づくと目の前の火に温められているのかほのかに空気が温かく、巨大な炎が巻き上げる突風がひりつけるほどの熱気を俺の全身に叩きつける。ヤハグルの狩装束は対人も想定しているためある程度鎧としても機能する為、狩装束の中ではかなり厚いものだがそれでも熱気で頭がゆだるような感覚を覚えてしまう
「…見つけた」
この大火災の中は、炎が吐き出す熱風に混ざったあらゆるものが燃えて吐き出された悪臭のミックスの中から、目的の匂いをかぎ取る。もう二度と…嗅ぎたくなんてなかったクソッたれの、ごみ見てぇに気持ちの悪い、獣に堕ちかけた狩人の匂いだ

無言のままに手に持っていた武器を消して、新たに火を噴く悪魔の姿を全体に掘り込まれたウォールナットにも似た色合いの木材を使用した弓と暗月の錫杖を出現させる

「アナスタシア。準備を」

暗月の錫杖を自分のすぐ横の床に突き刺すと、俺は側に控える従者にそう命令した。それに畏まりました、と一礼したアナスタシアは、軽くジャンプして屋上から飛び降りる。それを見送りつつ横向きに構えた弓に特徴的な一本の矢とも槍とも呼べぬ異質の物を番える

それは先端が張りのように細く鋭い円錐型の、直径2センチの円柱である、その表面にはリング型の溝が隙間なく掘り込まれており、俺はその溝に魔力を流し込むことをイメージしながら矢を構える。木材のしなる音と共に弓がしなり、地面に突き刺さった錫杖の先が花火のように一瞬光を放つ。その光は徐々にその頻度と数を増やしていき、最終的には激しく放電を始める

錫杖が放電を始めると同時に、弓に番えられた針にも変化が現れる。後ろから先端へとリングの溝を青白い光が駆け巡り、最終的には溝を越えて先端が光に包まれる。そして光に包まれると同時にそれは一本の稲妻へとその形変え、錫杖から発生していた光が全てそれに吸い込まれて行き、その稲妻は錫杖の放電など霞んでしまうほどの激しい放電に続いて俺を飲み込んでしまうほど強烈な光を放ち、そして

「大王グウィンに捧ぐ。我が技に祝福を」

その言葉と共に俺は針を…矢を放つ

瞬間。世界から音が消え去った

眩い閃光は一瞬にして消え去り、微かに炎が揺らぐ。俺は弓と錫杖を消すと教会の杭とルドウイークの長銃を出現させ、屋上の柵を足場に、それを大きく変形させるほどの力で踏み込み、炎の中へと飛び込む

全身に容易く己の身を焼き尽くす業火が襲い掛かるが、杭の一振りでそれらを払いのける。すると眼前に広がるのは炎の海の中に残された陸の孤島の如く、炎が存在しない十字路が現れる。その十字路の中に広がっていたのは警察官ら指揮したいが九つに死にかけが一人、流れ出た血の海で真っ赤に染まった十字路の真ん中に立つ処刑隊装備で返り血まみれのなりそこないが一体

「あ？」

なりそこないと俺が呼んだ処刑隊装備の…声からして男だろうそいつが俺の方を見上げて、その兜の下の間抜け面が幻視できるくらいの間抜けな声を上げる中、俺は男の正面に着地するとゆっくりと立ち上がり、ルドウイークの長銃を男へ向ける

互いに無言のまま、燃え盛る炎を背景音に向かい合う俺達。奇妙な沈黙が場を支配するが、それは早々に男の笑い声によって破られた

「……ぷ、アハハハハ!! 何だよアンタ？ そんなコスプレしてそんな武器持ってるってことは俺と同じラッキーボーイか？ あはぁ～っはっはっはっ!! 最高だよなこの力！ これがあれば何でもできるんだぜ!?」

心底から愉快そうに笑う男の声に、俺は銃口を向けたまま

「もういい喋るな、お前はここで俺が殺す」

まるで氷で出来たナイフを突き立てるかのように、冷淡に言い放つ俺に対し。男は余裕を崩すことなく

「……はぁ？ 意味わかんねぇこと言ってんなよ、俺達は同じ仲間なんだぜ？ そんな…」

男は肩を竦めながら、まるで今しがた殺害宣言をした彼に対して引

き気味に笑いながらも、涼しげに言葉を受け流そうとしているのか語りかけ始めるが。次の瞬間には瞬時に間合いを詰めた彼が、既に振り上げていた杭を振り下ろした

「っとぉぉぉぉ!?」

素っ頓狂な声を上げながらも男は彼の先制攻撃を左手に持つローゲリウスの車輪で受け止める。既に仕掛けが発動していたのか振るわれた車輪は高速で回転しており、杭との拮抗によりまるでシャワーのように大量の火花が発生し、金属同士が削り合う耳障りな金属音が連続して起こる

「っ！」

彼は車輪の下に左手を突き込むと長銃を男の腹に押し付ける

「っ!?」

咄嗟に男は空いた右手で銃口を叩くようにして払うが、若干間に合わずに脇腹の一部が放たれた散弾により抉り取られる

「ぐぁぁぁ!?」

悲鳴を上げながらも男は車輪の回転数をさらに跳ね上げさせる。叩きつけられた杭が回転により接地面が常に動き続けることで彼の込めた力のかかる支点がずれ、その剣身が不安定に揺れはじめる

「ち!?」

不安定に揺れはじめたことで込めた力が分散されてあることに思わず舌打ちした彼は素早くステップを踏んで後退。その直後にアスファルトを破壊し、その下の地面すらも抉り取るほどの怪力がからのいた場所に振り下ろされる

無言のままに2度、連続で長銃を放つ。放たれた散弾はアスファルトを破壊した際に発生した噴煙へと殺到するが、それら全てを鋼鉄の車輪により弾き飛ばしながら、その影に隠れて猛然と男は彼へと接近する

「速い!?」

想像以上の速度に即座に長銃を捨てるとくいを両手持ちに切り替え仕掛けを発動させる。剣身が直角に曲がり、瞬時に持ち手が数倍の長さにまで伸びる

「おるぅらぁぁぁぁ!!」
男が威勢の良い掛け声と共に車輪を振り下ろす。彼はそれを受けるのではなく、右足を軸にしてまるで舞踏会のダンスのような軽やかな身のこなしで振り下ろしを避ける。再び轟音と共に地面が砕け散るなか、両腕を交差させるように持ち直した杭を横長に振りかぶる
男は瞬時に開いた右手を杭の進行方向に合わせて柄にぶつけることで刃先が自分に当たる前に止めると、そのまま手首を捻ると彼の顔面に短銃を放つ。それを手首を動作を見た瞬間から行動していた彼は杭から手を離すとその場に手足を付けるほどに低く、這うように伏せて銃弾を避け、男は彼に対して再度車輪を振り上げる
「甘い!」
ノータイムで伏せた姿勢から左手を地面につけ、それを軸に弧を描くように無理矢理足腰の力で両足を男の足に叩きつける。いわゆる足払いと言うものを受けた男は車輪を振り上げたせいで不安定な姿勢となっていたこともあいまり、簡単に足をすくわれ宙を舞う。男の口からまず呻き声が聴こえ、そのままその声を驚きの物へと変える
「お代わりを食らえ!!」
そこに内心でそのように男に言い放ちながら足払いで使った両足の勢いを筋力に物を言わせて強引に殺すと素早くその場にしゃがみ、そこから再び左手を支えに体を横倒しにするように体を起こすと両足のひざを折り、胸につくほど引いてたっぷりと足に力をため込み。そしてそれを開放する
「ぐぁぁぁ!?」
常人であれば突然体を丸めていた彼が、次の瞬間男のみぞおちに両足を叩き込んでいた光景が見えるだろう。彼の体の動き出しなどの途中動作の一切が見えないほどの速度で繰り出された蹴りは凄まじい轟音と共に男の体をまるで小石のように吹き飛ばすと炎に包まれたブロック塀を粉砕し、まだ原形をとどめていた燃え盛る一軒家に衝突すると、その衝撃で一軒家を完全に崩落させその下敷きとなる
「…」
燃え盛る炎が家屋の崩落により発生した突風で激しく揺らめくさ

まを見ながら、手ごたえを感じられなかった彼はルドウィークの聖剣と獣狩りの短銃を出現させる
身構えた次の瞬間には駆動する車輪の回転音と共に炎を突き破り男が突進してくる。その光景は常人ならばしめやかに失禁して呆然自失となってしまうほどの恐怖と圧迫感を与えて来る。が、全然背、前世からこれ以上のものを食らい続けた彼からすれば臆する要素の欠片も無い彼は男の車輪を盾としたタックルをステップを踏んで男の右に回避すると、すれ違いざまに足の腱を狙って聖剣を振るう。炎が発する赤色の光を反射し、美しく輝く剣身が男の足を確かに捉える。が、その刃が足に命中すると同時に、彼の腕に凄まじい激痛と衝撃が跳ね返って来る
「ッ!?」
予想外の抵抗を受けた彼の体の姿勢が弾かれたことで後ろに轢かれて崩れる。彼は驚愕に目を見開きながらも、眼前に迫る男の左ひじを咄嗟にワザと体を滑らせながら思いっきり体を捻ることでその攻撃を躱すと、そのまま振り上げた左足で男の兜を蹴り上げる。金属製のブーツと金属製の兜のぶつかり合う甲高い。しかし常人ならざる脚力を表すかのような轟音が響き、直撃を受けた男は頭をのけぞらせ、衝撃でゆっくりと後ろに倒れ始める
それを見た彼は瞬時に両手を地面につけて体を支え、バク転する様にして突き出された男の肘を裂けつつ起き上がると、着地の瞬間に顔面を狙って放たれた男の左足の靴底を見ながら
「まずっ!?」
と、冷や汗を流しながらもそれを両手をクロスして攻撃を防ぐ。しかし十分に踏ん張れなかったかために2メートルもの距離を吹き飛ばされる
「くっ!」
一切の感覚を削がれ、小刻みに痙攣する両腕にやはり俺より力あんな、と冷静に敵と自分のスペック差を確認しながら宙返りして空中で体制を整えると政権を地面に突き刺し停止する
「く〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝〜〝〜〝〜〝い〝っ〝て〝え〝え〝え〝え〝

!?」
一方男は兜の彼のブーツの先の形に歪んだあたりを抑えながら、込み上げる怒りの衝動に駆られるままに叫ぶと、その怒りと頭を紛らわせるように車輪を地面に叩きつける。衝撃で破壊されたアスファルトがさらに細かく砕かれて宙を舞い、土煙が立ち昇る
「てめぇ気でも狂ってんのか！　俺たちは仲間なんだぞ!?」
と、ただかつけた車輪を拾うこともせず、怒りを抑えることなく彼に対して指を刺して怒鳴る
それに対し、彼は手首だけを男に向けると同時に発砲。放たれた弾丸は寸分違わず狙った通りに男の兜に直撃する
「ぐお!?」
まさか対話を試みようとした瞬間にノータイムで撃たれるなど想定していなかったであろう男は反応しきれず、しかし狩人としての本能がその一撃を防がせる。左手の籠手で受け流すように銃弾を逸らさせ攻撃を防いで見せる
「おおおおッ!?」
しかし意識外の一連の行動に理解が追い付かずに戸惑いと驚愕、そして籠手越しとは言え衝撃により痙攣する腕の痛に悲鳴を上げる男。その一瞬のすきに滑り込んだ彼は聖剣を振るい、男の喉を切り裂く。が、またしてもその一撃は固い皮膚に阻まれ喉の半分を切り裂くつもりだったその一撃は、結果として男の喉に細い跡を残すだけで終わってしまう
「がぁ!?」
しかし意識外から自分の喉を強かに切り付けられたのだ。その衝撃と、喉を叩かれた痛みと苦しさで呼吸できなくなった男から聞くに堪えない悲鳴を聞きながら、彼は悲鳴をあげる男の口へと、喉の奥の奥まで突き込む勢いで短銃を差し込む
「ぐむっ!?　ん☒ん☒ん☒ん☒ん☒ん☒!!　ん☒ん☒ん☒ん☒ん☒ん☒ん☒ん☒!?」
喉に極太の異物を押し込まれた男は満足に呼吸すらも出来ず、意識外からの攻撃による混乱の連続と激痛にパニック状態となった男は、

その口を塞がれながらやたらめったらに腕を振り回して暴れる男に対し、彼は躊躇なく引き金を引いた

刹那。男の悲鳴と混ざり合い、くぐもったものになった銃声が一度響き、男の首の上から下へと何かが下に落ちて行く様子が首の前後に交互に浮かび上がる盛り上がりから確認出来る

「ッッッッッッ――――――――――――――――!!」

男は自分の身に何が起きたのかも理解できておらず。その混乱と恐怖を体現するかのように目を見開き、体戦後に揺れ出すほど激しく痙攣する中短銃を乱雑に口から引き抜く。引き抜く際に引きずられるように血が口から溢れ出してごぽりと気持ちの悪い音を立てる。短銃にもベッタリと血と肉片がついていたが気にするそぶりも見せずに短銃を放り捨てる。そして代わりに開いたままの口の中に聖剣を根元まで突き込む

「ッッッ…!?」

差し込まれた衝撃で男の体が小刻みに痙攣し、それを見た彼はにたり、と鉄兜の下で嗜虐的に笑うと手に持つ聖剣を力任せに捻る。彼の体の中を貫いた剣身が肉を引き裂き、骨を押しのけて男の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。その間男の体はがくがくと激しく痙攣したのち、突然小さく体を震わせる程度にまで動きが小さくなり、それ以外の反応を示さなくなる

「…」

その変化を見た彼は手を止めて男を監視し、そして男の死を確信したのか、乱雑に右足で男ん肩を踏むと、そのまま男の体を踏んだ右足で押しながら男の血と臓物に濡れて変わり果てた聖剣を引き抜く。男の体はそのまま地面に仰向けに倒れる。そしてその口からこぼれ出した、元の判別ができない肉片混じりの血が溢れ出し、男の顔を真っ赤に染める

「ふぅ…」

聖剣をその場に捨てる。すると手から離れた瞬間背中に背負っていた仕掛けの刃と共に消滅し、彼は男の死体を見下ろしながら緊張の糸を切るようにゆっくりと息を吐き出した

「さ～て、こっからどうすっかなぁ…」
と、戦闘により疲れた体を労わるように体を伸ばしながら呟く彼にはもう先程までの殺意や戦意は残ってなどおらず、先ほどまでの彼が別人であったのではないか、あるいは憑依されていたのではないか、と思えるほどに纏う空気が変わっていた。そんな彼の背後から小さな水音が聞こえ
「ッ!?」
刹那振り返りながら腕を音のした方向へと突き出し、片手を地面につけた膝立の姿勢で拳銃に手をかける女性警官の鼻先に獣狩りの散弾銃を突きつける。その早業を前に、女性警官は悲鳴を上げることも出来ず、驚愕に目を見開きながらゆっくりと拳銃から手を離す
「…あぁ～すまねぇな、新手かと思っちまった」
彼はそんな女性警官の様子に手に持つ短銃をそこら辺に放り捨て、肩を竦めるとバツが悪そうに謝罪する。対して女性警官は何やら想定外のアクションを取られたのか困惑気味に視線を逸らす。その目は激しく揺れ動いており、焦っているのが手に取るようにわかった
「あ☒　　ぁ☒…」
処刑隊の男の口から血の泡立つ音と共に男のうめき声が流れ、それによって女性警官の視線が吸い込まれた。彼女の顔は表情が抜け落ちたかのような唖然としたものだったが、次の瞬間には彼女の真横で何か重量感のある金属同士がこすれ合う音が鳴る
「」
音のした方へ向くと、そこには彼がその右手にはすべてが黒で統一された巨大なガトリング砲を装着し、その銃口を男へと向けていた。ガトリングは彼の足程はあろう長銃身のバレル３本を三角形の形をした固定させるための鉄板で固定しており、ガトリング砲本体の後ろには直径２０センチほどの、ガトリング砲と同じく黒に染められた木製のタルがついていて、そこから延びるベルトがガチロング砲と接続していた
「え？」
現代日本では到底見る事のないはずの重火器の登場に、ショートし

た彼女の脳が発することのできた言葉はそれだけだった。そして次に彼女の口から発せられたのは彼がトリガーを引いたガトリング砲の、耳をつん裂く轟音に対する悲鳴だった

３本の銃身が残像でリングに見えるほど高速で回転を始めると、扇風機にも似た、しかしそれとは比べ物にならない轟音と共に大量の水銀弾が放たれ、排出された空薬莢がボロボロにひび割れ捲り上げられたアスファルトの残骸の上に落ちていき、瞬く間に小山を作り上げる中、男の体は瞬く間にひき肉に変えられ、その見るも無惨な姿は巻き上げられた土煙により隠されてしまう

「……」

時間にしておよそ1分、数万発を優に越える水銀弾を男へと叩き込んだ彼の行為は誰がどう見てもオーバーキルとしか言いようがないものだが、そこからさらに1分、殺したという確信を持てるまでガトリング砲を構えたまま土煙を睨んでいた彼は、それが収まった後に見えた男の居た場所に出来た抉れるように空いた穴を見て、彼は漸く殺したと判断したのかその場にガトリング砲を捨てた

「…？　あ」

そこで漸く両手で耳を塞ぎ、泣きながら体を丸めてビクビクと震える女性警官の存在に気づいた彼は、やってしまったとでも言いたげに声を上げた後、盛大な舌打ちと共に後頭部に手を当てながら

「あぁ～やっちまったなぁ～～～……！」

とため息交じりにそう呟く。元々この事態を止めることで自分の平穏を守ろうとしていた彼からすれば別に男を殺せた時点でミッションコンプリートと言っていいので見捨てて帰還しても問題はない…が、見捨てると言う選択肢は彼の思考で否定されていたため。どうやってなるべく自分が面倒ごとに巻き込まれないように彼女の安全を確保するか真剣に考えていた

そうして彼は男に向けていた分の警戒を解いてしまう。と言っても文字通り粉々に削り飛ばして殺した相手から警戒を解くな、と言う方が大概であるが。とにかくとして彼が意識を平時の物へと切り替えていたその時である。突如として彼の背筋を舌が這いあがるよう

な悪寒が走る
「」
　それに彼は男が居た場所へと凄まじい形相で振り向く。その表情はあり得ない、と言う彼の内心の驚愕と困惑を如実に表すもので、次の瞬間には彼は何もないはずの抉れた地面から発生した煙のようなものに呑み込まれた。そして住宅街を飲み込んで激しく燃え盛っていた炎は、煙と共に発生した衝撃波により、住宅街を焼き尽くしてもなおおさまらなかった巨大な火災をその燃料ごと吹き飛ばす
　煙は衝撃波と共に一瞬で消え去り、その後に残ったのはアスファルトの路面とかすかに残る建物の土台部分程度だけしか残ってはいない、変わり果てた住宅街であり。炎とそこから吐き出されていた黒煙が消えたことで顔をのぞかせた空には数台のヘリコプターが飛んでいた。恐らく消防や自衛隊、マスコミなどの所有するものだろう
「うっ…くぅ…!?」
　一方で彼は爆心地の中、未だ煙が残るその只中で地面に結界の大楯を突き刺し、暗月の錫杖を左手に持って結界の大楯へとその杖先を向け、残る右手で女性警官を背負う形で立っていた。が、無傷とはいかなかったようで苦し気に呻いているが、その視線は激しく煙を放出していて遮られてしまっている男の死体のあった抉れた地面へと向けられていた
　そして煙が晴れ、そこにいた者の正体が分かる
　人間をはるかに超える巨体を持ちながらもあ薔薇が浮かび上がるほどにやせこけ、左手だけが異様に発達した巨腕にオオカミを連想させるような足を持ちながら脚は人間のように発達したものであり、左手に比べて異様なまでに細い腕を持った、オオカミにも見える異形の頭とトナカイの様な大きな2本角を持った異形の化け物、間違いなく聖職者の獣である。が立っていたのだ
「…マジかよ」
　煙の下から現れた獣の登場に唖然とそう呟きながら、彼は背負っていた女性警官を地面に下ろし、結界の大楯を要に結界を展開して女性警官を守ると、3歩前へと踏み出し、錫杖を捨てて竜狩りの槍を出現

させると、それを構えて聖職者の獣に相対する

「…ッ！　■■■――――――――――――――――!!」

それに対して聖職者の獣もまた彼へ強烈な咆哮を放って答えると、次の瞬間には彼の頭上へと剛腕を振り下ろしていた

第8話　狩人の矜持　後編その2

更地となった住宅街の中心で獣と狩人が相対する

「■■■――――――――――――――――――――!!」

ビルの様な巨体を持ち、大気を震わせる巨大な咆哮を轟かせ狩人…彼へと聖職者の獣は自身の最大の武器であるその剛腕を振るう

「…」

それに対し彼は聖職者の獣の間合いを瞬時に理解し、軽やかなステップで放たれた横薙ぎのスイングの、その、間合いの内側に踏み込み、そこから獣の胴体へと更に深く足を踏み込むと片手持ちにした槍を突き出す。が、その槍先は獣や堅牢な皮膚により塞がれてしまう

「チ!?」

彼の腕にコンクリの壁にでも槍を叩きつけたかのような衝撃が走る。たまらず兜の中で苦痛に顔を歪める彼に対し、獣は剛腕に比べ明らかに貧弱な骨と皮しか見受けられない…しかし狩人たる彼よりも太い腕を振り上げ、彼を頭上から押しつぶそうと開いた掌をたたきつける

「チッ!?」

咄嗟に竜狩りの槍を捨てて獣が腕を振り上げたことで空いた左側へと体を滑り込ませるように飛び込み攻撃を回避し、両手で地面をしっかりとつかむように飛び込んだ勢いをコントロールするとそのまま前転で勢いを殺し、流れるように立ち上がると追撃で振るわれた細腕の一撃を避けるため前方にステップを踏んで逃げると獣の後方へと大きく回り込むように走りながら再び竜狩りの槍を出現させる

「■■ツッツ!!」

それに対し獣は両足に力を込めて勢いよくジャンプし、空中で彼へと向き直るとそのまま彼をその巨体でプレスしようと頭上に落下する

「上等ッ!」

それに対し彼は不敵に笑うと両手に槍を構え、その槍先を獣へと向

け、落ちて来るのを待ち構える。そしてタイミングを見計らって槍先を上にして槍を地面に突き刺すと、そのままそれを足場に跳躍する
「■！」
獣は咄嗟に彼を叩き落とそうと剛腕を振るうが空中で突然屈んだ彼がまるで地面を踏みしめるようにもう一度ジャンプして加速することで獣の振り上げたその腕が動き出した頃には既に彼ははるか上空にまで飛翔し、獣とのすれ違いざまに左頬から左目、額までをクラーグの魔剣で切り裂く
「ツッツッ!?」
突然のことに対応できずに切り裂かれ、視界の半分を激痛と共に失った獣が呻いた次の瞬間。傷口から噴出した炎に顔を焼かれて絶叫を上げながら体勢を崩した獣は地面へと落下し
「ツッツッツッツッツッツ!?」
彼が地面に差しておいた竜狩りの槍に左足の付け根を貫かれて絶叫を上げる。槍自体はあの巨体の下敷きになったのにも関わらず全体的なひび割れが見られるものの折れてはおらず、その切っ先は獣の足を貫く際に付着した血で真っ赤に濡れていた
「デエエエリャアアアアアアアアアアアアアア!!」
そこに雄たけびと共に上空から落下して来た彼が渾身の力を込めて大竜牙を振り下ろす
刹那、響き渡ったのは更地どころかこの町全体にまで響き渡る特大の破砕音であり、それは無事な周囲の住宅街の窓ガラスを粉々にする程度の衝撃波を伴い。その震源地である獣の頭部には大竜牙が直撃したことで肉が歪に破け、その内側にある頭蓋骨も完全に破壊されていたため、頭部はおわん型にへこみ、衝撃で頭から生えていた立派な角は根元からへし折れる
「チッ!?　浅いっ！」
しかし感じた手ごたえは致命傷止まりでギリギリ殺しきれていないと瞬時に理解し、彼はそれに対して内心でそう吐き捨てながら舌打ちしつつ、衝撃で顎が胸板につくほど勢い良く頭を真下に振り抜いた獣の足元に着地し、素早く後退すると大竜牙を捨て左手を獣へと突き

出す。その指先は中指と人差し指に親指を合わせた、所謂指を鳴らす際の手の形をしており

「落ちろ！　迅雷ッ!!」

と、彼がその宣言と共に指を鳴らす。刹那、獣の頭上に天から数本の雷が降り注いだ

「■■■■ッッ!?　――――――――――――――――!?」

それはまさに断末魔の絶叫だった。全身を激しく痙攣させ、唾液も鼻水も垂れ流すその姿は見るに堪えない醜悪な姿である。そのまま雷にその身を焼かれ続けた獣は、最終的に全身を飛来した落雷によってズタズタに焼き切られ、全身から肉の焼ける悪臭交じりの煙を燻ぶらせながら呆然と立ち尽くす獣に、トドメを刺さんと彼は躊躇なく爆発金槌を出現させ、両手に持ち直したそれの仕掛けを発動させる。金槌に仕込まれた炸薬部分とでも言うべき金槌の後ろ側から炎が噴き出す中。彼は勢い良く踏み込むと雷により体毛のほとんどを焼け落とされ、完全に丸裸にされた獣の歪んだ頭部へと金槌を振るう

鈍い爆発音と共に文字通り頭部を完全に爆砕された獣は、一瞬だけ大きく体を痙攣させ、次の瞬間には首から黒煙を立ち昇らせながら仰向けに倒れ、地面に触れると同時にその全身を血の意志へと変える突風を巻き起こして消滅し、獣の持つ膨大な血の意志が彼へとなだれ込む

「――――――――――――――――――――はぁ……」

金槌を両手に構えたまま、殺した獣の余韻に浸るように天を仰いでいた彼は、まるで思いだしたかのように深く息を吐き出すと、大きく息を吸い込み…吐き出しながら体を投げ出すようにその場に座ると、そのまま倒れそうになる自分を両手で後ろを支えて何とか防ぐ

激闘だった。それを全身で表すかのような彼の態度だが実際、彼は終始ペースをつかみ続けていたが、肉体的にも、そしてそれ以上に精神的にも大きく疲弊していた

処刑隊の頃の男なら素人が力を持って八茶けていた程度なので余裕で完封できたが、本能のままに最適な行動をとる獣となれば話は別である。なんせ推定彼以上のレベルの狩人の獣化である。攻撃を掠

らせもしない前提で動いていたおかげで五体満足だが、カス当たりでも食らっていれば即死していたであろうことは間違いない。それでも無事に獣を討伐できたことに彼は素直に喜びと深い充足感を感じていた

「……陛下」

その充足感の中、突然左横に現れたアナスタシアが彼の名を呼び、彼は口ではなく力なく上げた右手をひらひらと彼女に振る事で応える。それにアナスタシアは足すらも投げ出した彼の真横に座る。彼女のドレスは少しだけ煤に汚れていて、所々火の粉がついたのか漕げていたり穴の開いている箇所があるものの、逆を言えばそれ以外に傷らしい傷は何一つとして負ってはいなかった

彼女は私の可能な限り火災に呑まれて逃げ遅れてしまった人を救助してから戦いと言う内心の想いをくみ取り、先行して救助活動に動いていたのだ…が、そこの意思疎通は何と前話でマンションの屋上で突入前にしたごく短い「陛下」の呼びかけに対する「頼む」と言う返答しかないため、まさに以心伝心、一心同体を体現するかのような関係性である

「あの炎から逃げ遅れた民は全て救助しました。死亡した民の遺体も可能な限り損傷させないよう注意しつつ、出来る限り回収しました」

淡々と報告するアナスタシアの顔を、彼は見上げる形になりながらもその報告を聴きつつ、いつも殆ど最良の結果を持って帰って来てくれる彼女に流石は俺の従者だ、と褒めようとすると

「ですが救助作業を終えた直後に敵集を受けました。数は1名、陛下やあの傀儡の従者と同じ業と武器、そして衣服を身に纏っていたことから陛下が交戦していたものと何らかの関連性があると推測しますが、陛下と戦っていた敵が打ち取られるとすぐさま撤退しました」

と言ってきたことで、彼は鉄兜の内側で笑顔を真顔に変えると

「…攻撃してきたタイミングがかなり妙だな。それに取り逃がしたのか」

と、アナスタシアの言葉を聞きながら彼はそう呟く

ここで補足を入れるが彼は最初から男には協力者、もしくはどこか

の組織に所属していると思っていたのである。理由は原作において狩人になるために必要な血の医療というものの成り立ちから考えて単独で狩人になることは無理なためだ

理由は説明するとなるとかなり長くなるので別の機会に流すことになるが、とにかくそのような理由からアナスタシアを襲撃したと言う敵の存在は男の仲間かそれに近いものと判断できる（状況的にもただの人間がアナスタシアと戦えるわけがない為）

「申し訳ございません。何らかの魔術、呪術を駆使した訳もなく突然姿と気配を消されたせいで見失い、創作よりもまずは陛下の安全を最優先に考え合流した次第です」

と、正座した状態から土下座程ではないが深く頭を下げる彼女に、彼は

「いや、アナスタシアはよくやった。俺の意を汲み民を救ったのだから十分すぎる働きだ」

だから頭を上げてくれ、と続けた彼の言葉にアナスタシアはゆっくりと頭を上げ

「もったいないお言葉です、陛下…」

と、微かに震える声でそう主に礼を示す彼女に咄嗟にかける言葉が見つからないと言った様子に彼女を見つめていた彼はこれから言おうとしている言葉に引っかかりでもあるのか、一瞬顔を彼女から逸らした後、再び戻し

「――アナスタシア、改めて言うが…もう一度俺に仕えろ」

一度捨てた相手に対して、捨てた張本人が一体どの口を下げてこんな傲慢な態度を取れるのか、と内心で散々己を罵倒しながらそう口にした彼の言葉に、アナスタシアは衝撃を受けた様で固まっていた。仮面のせいで本来表情はわかりにくいが、微かに開いた口と少しだけ強張る頬が、彼女の内心の驚きを良く表していた

「――――――あっ……あぁ…」

そしてようやく脳が彼の言葉を理解したのか、衝撃から復帰した彼女は溢れ出す感情をうまく処理できず、その感情の渦を本能的に発した言葉と、その両目から溢れ出す涙で表す

「わ…！　わたっ！　私は陛下のっ、もの、ですから…」
必死に言葉を発する彼女の顔はどんどんぐじゅぐじゅになっていく、それでも必死に涙をぬぐう彼女のその健気な、どこか儚さすらも感じる姿を、彼はただじっと待つ。それが彼の責任であるがゆえに、彼女の答えを待ち続ける
「ど、どうかお側に…！　どうか…どうか永遠にっ…!!」
と、深々と頭を下げた彼女は、何とかその言葉を言い切る。そしてそこから堰を切ったように泣き出した彼女の肩を両手で触れると、そのまま体を起こさせながら抱きしめる。すると彼女は更に大声を上げて泣きながら彼の背に手をまわして強く、その今度こそもう離さないと訴えるように強く抱きしめる。それに彼は内心で渦巻く喜びに後悔に自己嫌悪などなどと言った様々な感情が激しく争う胸中を彼女に隠したまま
「許す」
と、ただ一言、彼女の答えを受け入れた
その関係を美しいとあなたは称しますか？　私は――――――
――だと思います